

第15回 全国バス学習研究集会

提 案 要 項

(小・中・高校)

期日 昭和55年11月7日(金)・8日(土)

会場 滋賀県神崎郡五個荘町立五個荘小学校

主催 全国バス学習研究会
滋賀県五個荘町教育委員会
滋賀県五個荘町立五個荘小学校

後援 滋賀県教育委員会
滋賀県神崎郡五個荘町

《 目 次 》

小 学 校

低 学 年 部

- | | |
|-------------------------|---------------------------------|
| 1 心のふれあう仲間づくり | 兵庫県 城北小学校
柳 内 翠 |
| 2 1年生の仲間意識を育てるために | 広島県 豊島小学校
里 和 美
原 野 二 九 三 |
| 3 仲間意識の充実 | 兵庫県 広峰小学校
田 中 照 子 |

中 学 年 部

- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| 4 個人思考と集団思考の深め方のくふう | 新潟県 五泉南小学校
大 関 徹 |
| 5 ひとり歩きをめざすバズ学習 | 徳島県 八万南小学校
北 村 艶 子 |
| 6 効果的な話し合いの進め方 | 愛知県 千両小学校
丸 山 正 克 |
| 7 子どもに認識主体をよみがえさせるバズ学習 | 兵庫県 砥堀小学校
小 林 繁 |

高 学 年 部

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 8 子どもが創る算数 | 愛知県 鷹来小学校
田 川 正 樹 |
| 9 学習意欲を高める班活動のくふう | 愛知県 勝川小学校
佐 橋 修 吾 |
| 10 相互活動の充実と多様な思考の育成 | 愛知県 北城小学校
丹 羽 茂 |

中 学 校 ・ 高 校

学 習 指 導 部

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 11 思考を大切にされた社会科の授業をめざして（公民的分野） | 愛知県 藤山台中学校
熊 谷 一 文 |
|--------------------------------------|-----------------------|

- | | | | |
|----|--------------------------|-----|---------------|
| 12 | 学力と人間関係の同時達成をめざして | 愛知県 | 東部中学校
堀場正美 |
| 13 | 学力を高めながら同時に人間関係を深める態度の育成 | 兵庫県 | 白鷺中学校
福島達郎 |

生徒指導部

- | | | | |
|----|------------------|-----|----------------|
| 14 | 生徒指導について | 兵庫県 | 白鷺中学校
坊垣正博 |
| 15 | 生きる力をつけるための生徒指導 | 広島県 | 豊高等学校
鎗野由起江 |
| 16 | 集団の高まりに働きあう生徒の育成 | 滋賀県 | 八幡西中学校
毛利蓮成 |

全
新教育課程部

- | | | | |
|----|----------------------|-----|----------------|
| 17 | 豊かな心情を育て自己実現をめざす教育活動 | 兵庫県 | 城陽小学校
安積悦朗 |
| 18 | ゆとりと充実をめざす指導 | 兵庫県 | 網千西小学校
山田正智 |
| 19 | 止揚の教育の充実をめざして | 兵庫県 | 白鷺中学校
高磯忠実 |
| 20 | 特別活動におけるゆとりと充実を求めて | 広島県 | 豊中中学校
賀戸文夫 |
| 21 | 中学3年修学旅行の取り組み | 滋賀県 | 五個荘中学校
東澤理賢 |

全
障害児教育部

- | | | | |
|----|------------------------|-----|----------------|
| 22 | 障害の種類や程度に応じた教育方法と場のくふう | 兵庫県 | 啓明中学校
山本正三 |
| 23 | 障害をのりこえ社会で生きぬく人づくり | 兵庫県 | 城南小学校
大畑稔 |
| 24 | 社会に適応できる人づくり | 兵庫県 | 白鷺中学校
梶原由紀子 |

○本校の部別冊（研究集会要録）



小 学 校 の 部

第15回 全国バス学習研究集会

心のふれあう仲間づくり
—— 教師と子どもによる 学級環境の創造 ——

兵庫県姫路市立 城北小学校

柳 内 翠

1 研究主題とその要旨

学級の経営は ひとりひとりの子の持ち味をみつけ、個性的な活動が 最大限に発揮できる場と 機会を保障していくことである。

それは、「できる子どもできない子ども、能力の高い子ども低い子ども、健康な子ども病弱な子ども、健全な子ども障害をもつ子ども、どんな子ども愛し育てる。」という 教師と子どもの人間関係のあり方によつて、子どもの伸びる方向や援助の方法が異なってくる。

入学期の子どもは、他学年の子どもより情緒的で、人間関係に敏感である。一対一が基本で「情」に結ばれている親子関係では、子どもの生地の姿が出るが「理」を土台にした集団の中の子どもは、ある程度身構えているので、指導の基本は より深い次元で知ろうとする児童理解にある。

人間関係ができてくれば、互いに言葉に表わさなくても なんとなく相手の感情や考えが通じ、相手の行動の意味が理解し合えて 共感し合える仲間づくりができる。

2 研究内容

(1) 学級環境の創造

入学期の子どもは、心理的に不安定であり、クラス分けという偶然の出会いによつて編成された学級は、無秩序で集団への所属感が希薄で混乱が生じやす

い。孤立や無関心などで沈滞しがちな子を変えていくために、バズ学習を導入して、明るい雰囲気の中で充実した話し合いのしかたに慣れさせることが大切である。

④ バズ学習の年間計画

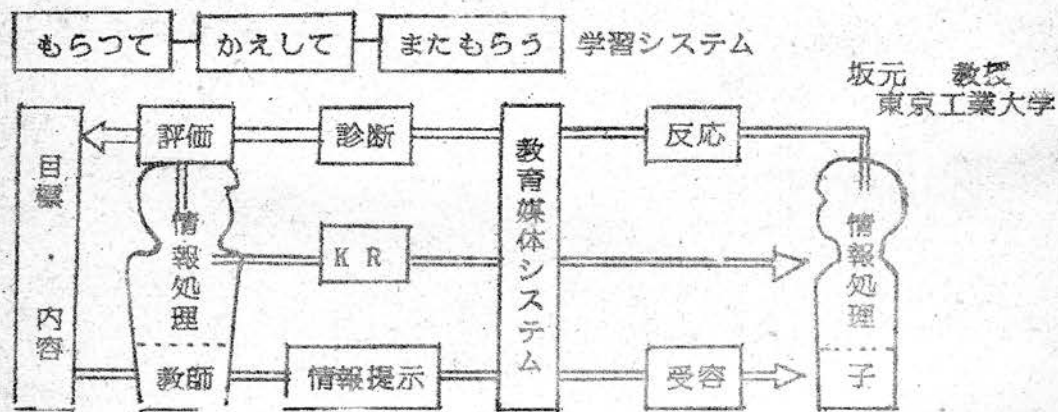
学習目標	期 標	計 画 の あ ら ま し		月 目 標		
		(個を育てる)	(集団を育てる)			
問題把握期	安心して学べるムードづくり	相手の話を聞く (姿勢) 相手の話の内容を受けて話そうとする	学級の 実態把握	お互いに相手に協調しながら補い合う	4	計画
			話し合いの 訓練		5	
			学 級 の		6	活動
			学 生		7	反省評価
			習 活		8	
			目 標 の 設 定 と 具 体 化		9	計画
			と 係 り 活 動		10	活動
			友 だ ち 理 解 と 協 力		11	
解決策の創造期	仲よく学ぼうれしさづくり	相手の方をみて気おくれせず はつきりと話す 語 情 線 語 表 現	よくききよくはなす風土づくり	うそを言わず真実を追求しようとする態度	12	反省評価
					1	計画
					2	活動
充 実 期	協力して学ぶ力づくり	話を終わりでまで聞いてわからない時は聞きかえしたりする		比べたり反対したり賛同したりして考えを深めていく	3	反省評価

③ ひとりひとりを見つめる学習指導

「やらされる学習」であるとすれば、ただ「さんすうの計算ができない。」というだけで、学校が子どもにとってマイナスのイメージになる場合もでてくる。個々の能力や適性に応じた個別指導を重視して 学ぶ楽しさをわからせていかねばならない。

遊びや具体物を通して学習内容を「提示」すると、子どもたちはうれしそうに「反応」する。しかし、それだけに終わらずに記録できたり 言語活動に生かされるよう高めていくには 個々の子にせまる「KR」が必要である。

「KR」こそ 一年生のたどたどしい発言を知的活動に結びつけていく唯一のポイントであり、学習意欲の喚起にもなる。



子どもの反応を大切にしながら指導をしていくと、聞きされがちだった発言も活発になり ペアパスが生きてくる。話し合いの技法がわかりだすと、グループパスもできるようになり、学習内容が理解しやすくなって おもしろ味がでてくる。この要領が身につけば全員参加のまとまりのある授業も可能になる。

3 問題提起

「生活をみつめる子」を育てることが仲間づくりに極めて大切であり、ひとりひとりを見つめていく教師の目が、子どもの「やる気」を育て、基礎学力の向上に役立つ土台となる。今後、さらに学習意欲のある子が示す行動を調べ、吟味して、「学習意欲づくり」を工夫していきたい。

第15回全国バズ学習研究集会（第1分科会）

1年生の 仲間意識を育てるために

広島県豊田郡豊島小学校

望 和美
原野 二九三

1. はじめに（地域の実態）

豊島小学校は、瀬戸内に浮かぶ周囲約11kmの島（豊島）にある。

豊島には、農業家庭と漁業家庭が共存している。農業は、みかん生産をしている。漁業家庭では、両親が長期出張（1ヵ月～半年）のため、幼稚園に入園してから祖父母と、あるいは兄弟姉妹だけで生活している子どもがかなりいる。また、豊次学祭で集団生活をしている子どももいる。幼児期には、両親と共に船上生活を送るため、他の同年代の子との交わりがなく、語い力が乏しく、社会の集団生活に慣れることができない。個人的な生活力はたくましいが、他との協調性や集団の一員としての自覚というようなものが芽生えていない。

2. 入学当初の子どもたち

〈生活面〉 明るく純朴でカラッとしており、くよくよしない。それが一面では、けじめのつかない生活態度を改めるのに 困難をきたしている。集団生活のルールが身につけていないため、身勝手な行動を通そうとする児童が多い。また、集団の中での意思表示のし方を知らないため衝突がおこりやすい。

〈学習面〉 全般的にみて、学習規律が未形成で 学習のし方、考え方、聞き方について指導しているが 受け入れる素地ができていない児童が半数ぐらいいる。

〈健康面〉 当初の健康診断で視力の悪いのが目立った。また、手洗い、歯みがき、うがいなども徹底していない。漁業家実家はほとんど公衆浴場を利用しており、児童の中には、なかなか下着を洗濯できない者もいる。学校では給食後の歯みがきを行っている。

3. 課題

- ◎ 友だちどうし仲よく助け合い、仲間はずれをつくらない学級をつくる。
- ◎ 係活動、当番活動を通して、集団としての仲間意識を高める。

- ・教室の清掃をみんなでする。
- ・朝の会で学級の1日の目標を決め、帰りの会で反省する。
- ・グループ(4~5人)で、1日の生活について話し合い記録する。
- ・グループの中で(まず2人組から) わからない子、何もしない子をとりに残さない。
- ・けんかは、必ずその原因についてみんなまで考え話し合う。
- ・集団を意識した発言のし方を指導する。

4. 事例

5. 問題点

子どもたちが「仲間の存在を意識しながら行動できる」ということが、1年生の仲間づくりのねらいであろう。しかし、学校での指導と、下校後の生活との間のずれが大きいため、わがままを通そうとしてゆずらなったり、相手の気持ちを考えずに粗暴な言葉を口にしたたりする子どもがいて、集団をかきまわすことが度々ある。このような中での学校教育の役割と、あり方を考えていきたい。

第15回 全国バス学習研究会

仲間意識の充実

— 各科的学習のとりくみの中で —

兵庫県 姫路市立広峰小学校 田中照子

1. 研究テーマとその要旨

低学年の子どもは、遊びの中から得がたい学習をされると言われる。絵や、粘土で作品を作って話ができる。しかし、またまた自己中心的な行動が多く見られ、とすると、集団の中からはみ出したり、グループの話し合いに参加できないことが多い。ひとりひとりの持つ豊かな個性や創造性を充分発揮させるために、ひとりひとりの所属している集団が、あたたかい雰囲気になり、効率的な話し合いがなされるように、お互いが助け合い、協同で学習することにより、人間関係と同時に、学力も高めていきたいと考える。そこで二年生の社会科、理科、図工、算数による各科的なたりくみの中で、バスがどのように生き、集団が高まっていったかさぐらうと思った。

2. 研究経過とその概要

(1) 集団づくりの視点

① 個々の子どもの願いから

- ・発表ができるようになりたい。
- ・友だちと仲よくしたい。
- ・楽しく学習したい。

② 仲間づくり

- ・4人グループをつくる(異質)
- ・リーダーをきめる 交替制
- ・みんなが学習できるように話し合う。
- ・グループ遊びも考える

③ バスのためのたがやし

- 話すことへの抵抗を少なくするために
- ・生活の自己反省カード

- ・発表回数自己点検
- ・友だちの発表不足をグループ全員で補う。
- (仲間意識を持たせる) 作業活動もお互いに注意しあい助ける。

(2) 総合的学習の一実践例 2年 田畑で働く人々 (社会科を軸に)

① 農家の人々は、田畑をたがやし、いろいろなくふうや苦勞をしながら、米や野菜、果物などを作っている
(中心概念: ねらい)

② (理) 種子の発芽と成長をしらべる

草花の種をまき、その成長のようすを観察しながら、環境によって育ち方や花や種子のとり方もちがうことがわかる

③ (図) (見学や観察後の処理)

見学してきた田植えのようすを絵にあらわしたり、草花の成長も絵でよみにする

④ (算) (成長過程の記録をとるものさし)

長さを測定する意味がわかり、ものさしを使って花や作物の丈の変化を知る。表やグラフに表す。

(3) 実践活動例

春の種まきをしよう。

米も種をまくのだからか。

米つくりを調べよう

田植えの見学

- ・花や作物のたねまきをしらべる。
- ・場所、まき方、準備、種まきをする
- ・種まきのあとの世話 グループでする
- ・発芽数の表とグラフ ⑤
- ・観察したことを絵や短い文で表す。⑥

米はどのようにしてつくられるのだろうか

(田んぼを見に行ったらよいということもわかってはいたが、何を見るのか目あてがはっきりしないので全員バスによって田植えのようす(米つくりは田ですること)をじっくりつかませた。

① 見学前の子どもの意識調査

- ・米も種をまく(21人) ・草のようなものを植える(9人)
- ・機械で土をたがやす(12人) ・田のすみに苗がつくってある(1人)
- ・野菜が作ってある。(6人) ・田に水を入れていた(4人)
- ・近くに田がないので分からない(8人) ・地下たびをはいている(3人)

② 見学の相談と視点

- ア 働いている人のようすを見る
- イ どんな道具や機械があるか
- ウ 田のようす。(土がどのようになっているか)
- エ 田うえはどのようにするか
- オ 米になるのはいつか。花がさくか。

グループバスにより、ひとりずつ分担して調べる班や4人が一度にいろいろいろいろみてる班に分かれた話し合いに参加しにくい子は何を見てくるか教えていた。

③ 見学と視学後の学習活動

ア. 見学に行く。前日に話し合った準備物を持って話しながら、また、田で働く人に聞きながら、全員が同じ目あてに向かって取りくんだ。中にはやはり学習活動からはみ出し一つぐらいしか見てなかった子もいたので、見学後のバスのあと、もう一度たしかめに出るように注意をあたえる。

イ. 見学での話し合い。グループ内でや、発表の苦手な子も自分の見てきた事なので素に話をしていたし、不足部分は、他の子がつけたすように注意した。

- ・田のふらの黒いビニルシートは？ ・機械は早く植えることができる。
- ・やはり種をまいてつくるのだ。 ・田のすみの方は手で植えている
- ・なえ箱のうらの根をかまで切っている。 ・腰をまけて手植えはつかれるな。
- ・9月のはじめ頃花がさくそうた。 ・苗をたはにする時 こしかけていた
- ・足も手も黒いものをつけている(手甲、きょうはん) ・泥まみれになっていた。
- ・ひまわりや、ほうせんかと同じように種をまくのだ。(理)
- ・手で植えるところはつなをはっていた。 ・間をあけてきれいに植える
- ・水のとり入れ口があった。 ・水の番をするそうた
- ・苗の長さはどれくらいかな(算) ・田植えから米ができるまでの絵をかこう(図)

以上のいろいろな話し合いから疑問や 新たな課題も見つかった。

ウ 見学後の活動と学習

ものさしの使い方を知る

(三)

ひまわりや、ほうせんかの丈をはかる…経緯

・ 苗の丈はどのくらいまでのびるかをはかる

田植えのようすを絵にあらわす。

(四)

・ なわしろ 田おこし しろかき

・ 田うえ くすりかけ(夏休みに)

各グループで手分けして絵をかき、短い文でようすをかく

スライドを見る

(五)

見学したこと、絵に表わしたことを再確認し、

取入れまで長い間かかることも知る。

3. 反省とまとめ (問題提起も含めて)

学習計画は、教師の指導計画を子どもの種子の発芽や成長の観察の中で「水も種まきするの？」ということをはから話し合いをしながら修正していった。その後、苗の大きさや伸びる様子を観ることから、ものさしで計る(算数) 絵にかこう(国語)といふ順序で総合的に取りくんでみた。子ども達は、共通の課題(保はどのようにして作るの?)を見つけ、見学学習する中から、トラクターや耕うん機、田植え機の働きにおどろき、田植えだけでなく人々が協力しあって働くことの大切さを学んでいる。また、自分達もグループバスを行い、協力して学習課題に迫ろうとすることを体験したのではないかと思う。見学や活動することを通して学習する雰囲気も高まり、自分で探ろうとする自主的な気がまえりできてきた。そして社会科をやりながら他教科の目標もある程度達成された。しかし、まだ、自ら発表しにくい子や、興味を持続しない子など、意欲のちがいや参加度をどのように調整していけばよいか。さらに、修学年の特色で、自己主張が強く、や、協力的な話し合いにならない場合があるが、人間尊重の基盤にたつた学習集団の編成を修学年としてどう考えていくべきか、など、問題が残された。

第15回全国バス学習研究集会

個人思考と集団思考の深め方のくらり

50年からの歩みをふりかえって

新潟県五泉市五泉南山学校

大岡 廉

1. はじめに.

- 。 地域の実態から

2. 実践の経過

(1). 学級経営の悩み

(2). 生徒指導と学習指導の統合を求めて

(3). 授業改善を求めて. — 再び授業から—

① 班編成の原則

② 班編成の方法

③ 学習の約束ごと

④ 授業の流れ

⑤ 授業実践の視点

- (4) 復習バズの設定
- (5) 班ノートの活用
- (6) ソシオメトリーの実施
- (7) バズ学習に関する調査

3. 実践例

- (1) 班ノートより
- (2) バズ学習この一年 <児童作文より>
- (3) 社会科学習にみられたS子の変容
- (4) 学級会話し合い活動にもバズが導入されて
- (5) バズ学習に関する調査から
- (6) ソシオグラム
の推移

4. 学習記録の充実を求めて

<K男の学習の記録より>

5. 実践を振り返って思ひこ

第15回 全国バス学習研究集会

ひとり歩きをめざす

バス学習

徳島県徳島市八万南小学校

北村 艶子

I 本校でのバス学習のとりくみ

(1) ひとり歩きをめざすために。

「生きぬく力を」これが本校の教育目標であり、わたしたちが求めている「ひとり歩き」をめざす子供像でもある。

わたしたちがめざす「ひとり歩き」とは、今・現在生きている子供に期待するばかりでなく、未来に向かっている「ひとり歩き」の姿を想定しているものであり、「学習のひとり歩き」の場合でも、単なる部分の自力化というばかりでなく、その子供の生きる営み全体にかかわるものとしてとらえているわけである。

未来の社会を支え生きぬいていくための「ひとり歩き」には、まず自ら考え、自ら解いていく態度・力、つまり自己をみつめ、更に自己をみがくことが必要になってくる。

(2) 自己をみがくために。

① 思考力を深める過程の重視

ひとりひとりの子どもたちが学習の意欲を喚起し、学習を方向づけたり統合したりするために、心的エネルギーとしての内発化をめざし、意欲的に価値を求め

る子供をめざすということになる。では「学びとる力」を具体的に身につけさせる手だてとは、何であろうか。

まず、みつける力(気づく→あつめる→わかる。)次は、くらべる力(比較→つなぐ→くみあわせる。)更に、まとめる力(広げる)などが考えられる。これら知的なものをふつう思考力といわれているが、同時に人間関係をも高める「バズ学習」の実践により、本題の育成を図ってきた。

2 わたしの実践したバズ学習

(1) ねらい

バズ学習を、知的なものと態度的なものとの統合による、小集団による話し合い活動によって、望ましい人間形成をめざすという基本に立って、これを体系化した。

(2) 視点

- ① 思考力を深めるための探求過程による、授業の構造化をはかる。
- ② 小集団での話し合いを重視する。
- ③ 「ひとり歩き」のための 授業改造をはかる。

(3) 学習過程と 位置づけ

構え	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 事象発見 ◦ 問題発見 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 身のまわりのできごとや自然の事象などから、問題を見出す。 	I みつける BUZZ
自主	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 問題分析 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 問題解決のために、情報を集めたり整理したりして多面的な予想をたてる。 	I あつめる わかる BUZZ
活	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 解決方法 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 予想から仮説をたて、検証の具体的方法を考える。 	II くらべる つなぐ BUZZ

動	・解決のための 実践	・調査・実験・観察などを 行い問題を解決する。	Ⅱ くらべる くみあわす BUZZ
一般化	・解 決	・解決の結果を記録する。	Ⅲ まとめる BUZZ
発展	・事 象	・適用発展をはかる。	Ⅲ ひろげる BUZZ

(4) ひとり歩きのために。----- バズの位置づけ

① I...みつけるバズ-----資料や事象から問題に気付く、それを解決しようとする意識が働く。そこで問題を発見する。

・問題に対し、どんなしかたをすれば解決できるだろうかを予想し、過去の学習より考えられるいろいろななかから最も適切なものを考え出す。このように、拡散的思考により方法を考え、集中的思考によって最も適切な方法を考え出すバズを、ひとり歩きIとした。(あける・集めるバズ)

② II...くらべるバズ-----自ら考えた方法で学習を進め、その結果を比較し結論へみちびく。

・さらに学級全体で比較し、一般化された結論へとみちびく。(つなぐ・くみあわすバズ)ひとり歩きIIである。

③ III...まとめるバズ-----本時の学習をまとめる。

・本時で学習したことが生きてはたらく学力として定着するよう、適用発展をはかる。(広げるバズ)ひとり歩きIIIであるが、教師のアドバイスが必要である。

(5) バズに期待するもの。

① 思考力を深める。

↓
・ 己の立場をもたせること……児童自らに自分なりの発見をさせること。常に自分なりの立場をもたせるために、それが可能なだけ、己の時間を確保してやることである。他人思考の高まりである。

↑↑
・ ①児童が、自分のことば(考え)でもって互いにゆさぶり、高め合めあう姿、ここに集団も高められる。これが、バズに期待する姿である。

② 人間関係を高める。

・ 人の話をよくきくということ……これは相手の立場に立って考えることであり、人間関係の基本である。同じ目標に向かって、協力し合い、助け合い、はげまし合う姿こそ、望ましい人間作りであり、バズに期待するものである。(ホニ)

③ 操作力を高める。

・ 学びとる力の習得力の体系をそしきしていく力を操作力と考えている。
「考えを生み出す力」「行篤をおこそうとする力」
「感じ方を強める力」これらが相互的に有機に統合し合い、ひとり歩きをめざす、バズに期待する、私のねがいである。(ホニ)

④ 人間変革をめざす。

・ ひとり歩きのめざすところは、人間変革である。話し合い、みがき合う姿から望ましい人間へと高めたい。バズの到達である。

効果的な話し合いの進め方

— その周辺のな問題について —

愛知県豊川市立千両小学校

丸山正克

話し合いの進め方

(I) 話し合いを進めるための周辺のな問題

効果的な話し合いの進め方というテーマは、何となく「話し合いの技術を問題にして論じられるような印象を受ける。

話し合うということは、授業過程の中で、ある問題を解決するための効率のよい学習形態であるという単純なものではない。それに加えて、学力全般の向上、人間関係の改善、あるいは、学習に対する意欲の育成など個人や集団の成長を促進させるための、より有効な方策である。

これは、話し合うことを通して、自己実現への意欲を育てるとともに、それを支える学級集団の育成同時達成を意図するもので、学級づくりの要となるべきものである。

したがって、この様な考え方は、学級経営の中核に於けるべきものであって、単に「話し合いの技術」という小手先の問題ではない。効果的な話し合いは、効果的な学級づくりの基点であると考えている。

そこで、効果的な話し合いを進めるために、その周辺にあるいくつかの問題に着目し、ささやかな実践と考え方を応べて問題提起したい。

- (1) 子どもたちに心理的な安定感を与える
- (2) さりげなく自己評価の機会を与え、自分自身を見る目を育てる
- (3) クラス成員間に自由な相互作用の場を与える
- (4) 知的好奇心を育てる。

(5) 子どもを積極的に理解し認める場をつくる。

(II) 話し合いを進めるための方策

(1) 心理的安定感を与える

最近、注目されていることにロブ・マリオン効果というものがある。一種の暗示的対応の仕方です。子どもたちに、やればできると言う期待感を持たせると、全ての活動がより効果的になると言われている。

ところで、私達が、日常子ども達に向けて口にすることばは、これとは逆に、

- ・ 何回言っても出来ない
- ・ また、同じところで失敗した
- ・ なぜ、こんな事が出来ないのか
- ・ まだ、わからないのか

といった類のものである。安定感や期待感より、不安感や挫折感を与えかねないことばである。これでは、反って、子ども達は自分の行動を抑制してしまうのではないかと思われる。失敗を恐れ話し合いも消極的になるだろうという懸念が生ずる。

そこで、子ども達の全ての行動にわたって、失敗は、できる限り不向にし、事の正否を向わず、子ども達の行動事実のみを積極的にとり上げるよう配慮している。また、その事をクラスの干渉フレームズにし、子ども達の行動をそこに集約されるようにしている。

「自分の成果を自分でつかめ、みんな協力4の1」

必ず「成果はつかめるはずだ」という気持ちを持たせるような援助をしないかぎり、常に教師の顔色を伺い、正答だけを追い続ける話し合いでは、教師にとっては効果的であっても、子どもサイドでは、効果的であるとは言えない。

最終的には、教師の積極的なとり組み、とりわけ、どう援助するかという問題でもある。

(2) さりげなく自己評価の場を与える

スループによる形成的評価の理論が紹介されて以来、その実践は各地でその成果を上げている。めん密な計画と、それに基づく着実な実践は高く評価されている。その結果を指導体系の中で生かしていく事は大切なことである。子どもについてこの貴重な情報である。それならば、子ども達自身も、その結果を知ることによって、自分自身のつまづきを発見し、その排除のために努力するに違いない。つまり、自分自身を見直す目、自己評価をするという態度の育成が必要ではないかと考えた。

それを、できるだけ低学年から行なおうとするなら、さりげなく、自由な方法で行わせるのがよいのではないかと考えて、「まとめ」と称して授業終了後書かせるようにしている。

まとめ

- ・この時向で新しく発見したことわかったこと
- ・自分の考えの変わったこと

(ここが自己評価に当る部分)

- ・次の時向に問題にしたいこと

また、自分の誤りやつまづきを発見するための話し合を重視している。

<例>

漢字練習 問題を与え子ども達がとり組んでいる時に一人一人をチェックする

誤っている漢字を板書する

どこが違っているのか自分のと見比べてグループの人に話してあげなさい。

この様な内容の話し合い、あるいは、友だちの誤りをさがしてあげる話し合いなども重視している。

みんなの誤りをみんなで解決してあげようという意識の高揚を意図しているわけである。

こうした内容の話し合いの蓄積は、その時点の話し合いが効果的に行われるばかりか、子ども達が、いろいろな場面で随時的に

フィードバックするようになる。話し合うことを通して新しい態度の形成を期待することができる。これを子ども達に合った形で授業の中に位置づけることが必要である。

みんなでまちがいを考えるようになってから（アンケート）

- ① 間違いをそのままにしてあかなくなった。 89%
- ② まちがっても、みんなで考えてくれるの
でやる気になれる 78%

この結果、もう一度やってみよう、もう少し練習しようという発言が聞かれ、次の学習への強い動機づけとなる。

効果的な話し合いというのは、話し合いそのものが活発であるということと共に、子どもの変容をもたらすのに効果的であればならないと考えている。自己実現への努力は、話し合いをより活発にするにちがいない。

(3) 自由な相互作用の場を与える（自由バスの導入）

あらかじめ編成された小集団での相互作用を固定バスと称するのなら、自由バスと称する手法は、小集団の枠を越えてだれとでも自由に話し合う事である。

主な理由は①わからないところを教えてもらう ②はっきりしない事を確かめるといふものであり、現情は、漢字の読み、ことばの意味、算法の確認、名称の確認など学習の基礎的な事柄に關することが多い。

例えば、月別の欠席者数のうっり返りを折れ線グラフに表わそうとする時

- ・縦軸に何を表わし、横軸に何を表わしたらよいかどうもはっきりしない人は聞きに行きなさい

（自由バス）

- ・どんな事を聞いてまたか発表しなさい（確認）

子ども達の90%以上が、この手法が「好き」と答えている。

その理由の中に

- ・説明の練習になる
- ・わからない事をそのままにしない
- ・グループでもわからない事がきける

と言うことをあげている。70%の子どもが「自分の意見が言えるのは固定バスだ」と言っている。

この事から、比較的複雑な思考を必要とする話し合いの補助手段になるという意味が強いのではないかと考えている。

また、聞きに行く相手について子どもに尋ねてみると。

- | | |
|-------------------|-----|
| ・同じグループになれなかった友だち | 52% |
| ・よくできる子 | 50% |
| ・仲の良い友だち | 38% |
| ・わかっている人ならだれでもよい | 47% |

と言う結果をみた。いつでも誰とでも効果的な話し合いができるということ。人間関係を基盤とするバス学習では最も重要なことである。好きな子、仲良しからでなければ、情報を得ようとしないうちは、どうも効果的な話し合いは望めない。この結果から即断は極めて危険であるが、話し合いの状況を併せて考えると、誰とでも話し合えるという気持ちが育ちつつあるように思える。

(4) 知的好奇心を育てる (自己評価の項と一部重複する)

好奇心は、内発的動機づけの重要な構成要素であり、新奇さ、意外さ、あいまいさ、複雑さをもつ刺激によって生ずる驚き、疑問、矛盾などが生ずる。そのために特定の情報を求めようとするものといわれている。

したがって、これを育てるためのある操作が必要になってくる。一つには、課題や問題意識の操作が研究されている。また、自己評価によるフィードバック情報もそうである。現在、試みている方法に「授業のまとめ」がある。多分に「さりげない自己評価の意」を持っていて、実際には、それにとどまらず、知的好奇心を生じやすくするような指示を与えて書かせている。

その内容は おおむね次の様である。

- ① 新しく教えてもらったり覚えたりしたこと
- ② 新しく発見したこと
- ③ 考えが変わったこと
- ④ つまづいたり、まちがったりしたこと
- ⑤ 疑問や問題
- ⑥ 考えたこと 感想

授業の内容に応じてこれをアレンジしている。

「方言の学習をして」

・方言は、まえまでどこでも通じると思っていたけど、その地方の人達だけにしか通じないという事がわかりました。

それで、この前、四国のおばあちゃんやおじいちゃんやしゃべったけど、やっぱり、あこうにも方言があるので、しゃべっていた事があまりわかりませんでした。だから、方言はおもしろいなあと思いました。

・方言の勉強をしておもしろかった事は、ぼく達の使っていることばにも方言があるという事でした。

ふしぎに思ったことは、共通語が広まっているのに、なぜ、方言が無くならないのか、くわしく調べてみたいです。

こうした子どもの気持ちや要求は、話し合いに向けられているものではない。しかし、ここで育てられたであろう学習に対する態度（好奇心）は、話し合いの場においても積極的な行動を生み出すにちがいないと考えている。

(5) 子どもを積極的に理解し認める場をつくる。

当然な事であるが、なかなか実践できない。効果的な話し合いは、その機会と内容が適切でなければならぬ事は、これまでもたびたび問題となってきた。

しかし、往々にして、教師の指導の系統やスムーズな授業の進行に気をとられ、次から次へと子どもを指名し正答を捜し求める

形態をとりがらである。話し合いはいきおい、正答をいかに早く出させるかということの操作に終わってしまい、それがみられない。その話し合いは無駄であったと思いがちである。ましてや、誤答は切り捨てられてしまう。

その結果、上位群員が積極的に話し合いの内容をまとめてしまったり、あるいは、相手を批判したりけなしたりするということが生じかねない。これは、人間関係の崩壊につながる事である。そこで、子ども達には次の様な事を要求してきた。

① 誤答は正答を出すための大切なヒントである。

② 相手を頭から否定することはばは使わないようにしよう。

常に相手を意識し、立場を認めた上で自分の考えを述べるようにケース・バイ・ケースで指導を加えてきた。

教師は、子どもひとりひとりに目を向け、子どもの向題を積極的に指導の中にとり入れる努力と、つまづきの原因をていねいに除く努力を重ねる必要がある。従って、授業中の観察はもとよりノート、学習記録などめんどろな点検と記録が必要になる。

そこで得た情報を加味した指導計画を、ある単位ごとにつくり授業を進めているのであるが、現在は、試行の段階で公表するに至っていないので、ここでは省略する。

しかし、この作業は、子どもの実態、子どものペースで課題を設定し話し合いの場を設定する上で、極めて重要なファクターであると考えているので、今後、さらに研究的実践を続けていきたいと考えている。

〔Ⅲ〕現状とこれからの見通し

これまで述べてきたことは「効果的な話し合い」というが「効果的」という事の意味に二通りあるという事である。その一つは、話し合いそのものがうまくいくという意味の効果的と、もう一つは、話し合う事を通して、新しい子ども、あるいは、子どもの変容を促進するという意味での効果的という事である。それは、バズ学習の本質の中で論じられる統合ということと、同時学習の原理に基づいて分離される内容ではないだろう。

目的の達成のためには、先に述べた様に「話し合いのさせ方」技術論ではどうも解決できないと考え、視点を周辺のな問題に向けて、ささやかな実践の中で得た考え方を述べてきた。

ふり返って、クラスの現状を次の様なアンケートによってとらえてみた。

このクラスは好きですか	92%
学年が変ってもこのクラスの人と一緒にになりたいですか	88
このクラスでの勉強は楽しいですか	89
このクラスに居るとやる気が出ますか	84
このクラスに居ると自分の成果は上ると思えますか	92
このクラスの人のだれとでも仲間になれますか	62
よその学級に自分のクラスが自慢できますか	59

この結果は決して恒常的なものであるとは思えない。日々の子どもの様子の中には、この結果を否定するような状況は多い。

今後の見通しは、言うまでもなく、この様な結果を恒常的に見るようになった時、効果的な話し合いは成立するにちがいないと確信している。話し合いを一面的にとらえるならば、よい結果を見ることは比較的容易かもしれないが、バス学習は全てを包摂した教育方法であるという立場にいて考えてみると非常に多くの問題を解決しなければならぬ重を痛感している。

以上、効果的な話し合いの進め方に対する問題提起としたい。

日刊 学級研究 1412
発行

子どもに認識主体をよみがえさせるバズ学習

兵庫県姫路市立砥堀小学校

小林 繁

1. 学級づくりと子どもの認識主体

私は学級づくりの理念として、学級集団の民主化とか個の主体化とか自己実現といったあまりに多くの言葉にふり回されていたと思う。次々と生まれてくる言葉の理解に走りすぎて、子どもの理解を忘れてしまっていた。こうしたときに私はバズ学習に取り組んだのであった。何もわからなかったが、決して個を集団に埋もれさせてはならないとだけ考えていた。そして、やっとひとりひとりの児童に目を向けることができるようになったのである。

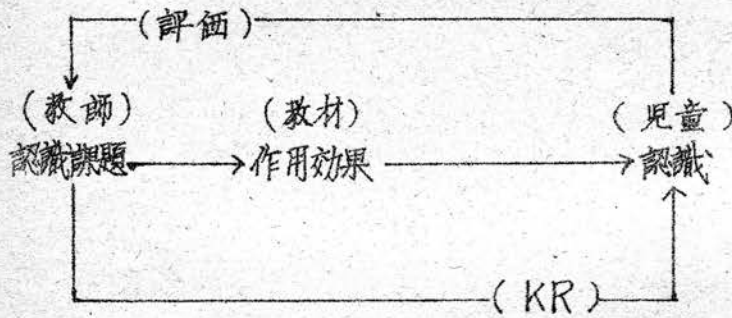
バズ学習の中心はバズをすることであろう。しかし、それはどの児童にもたやすくできることではない。バズを可能にする「話せる」ということが個々の児童にきたえられていなければならない。話すことの習熟をさせていたとき、ふだんはよく話せる児童が言葉につまって話せないときがあった。与えられた話題についての内容がなかったからである。すると、話が下手だと思っている児童は生活経験が乏しくて話す「なかみ」がないのかも知れないということに気がついた。

私はバズ学習のプロセスでは個人思考を最も大切にしたい。話せる話題には学べる能力に合った教材が必要であり、話すには教材についての認識が必要である。児童の認識はどれも尊重されなければならない。児童の認識は特に個の認識はその質を問いすぎてはならないと思っている。話せる「なかみ」をもつことは個が集団の中で伸びる可能性を保証し、子どもを認識主体にすることではないだろうか。

2 教授と学習活動

学習過程において、教師の教えたいことをどのように児童の学びたいものに転化させるかという作用効果までのプロセスを教授と考えたい。学びたいという要求が原動力になって、児童が自由な認識主体者として知的活動を始めてからを学習活動と考える。

教授においては、教える内容が論理や系統をもっている真実か否かが大切であり、学習活動においては、その効率がよいか否かの問題よりも子どもが認識活動を主体的に行っているか否かが重要な問題であると思う。



課題

与える物の量か
さによって、量
かな人間が期待
できる。

学習活動の成立

- ① 教えたいことが学びたい要求にあったとき。
- ② 学びたいという要求が学べる能力に合ったとき。

作用効果の個人差

- ① 児童の個々が独自の感じ方を持っている。
- ② 児童の個々が独自の考え方を持っている。
- ③ 児童の個々が独自の物の見方を持っている。

感性的な認識

認識は事実についての児童の反映であるが、個々の児童の主観によって歪折している。

言葉の交通

交通の便利なバスによって、個々の主観的な知覚が相互作用をうけて客観化されていく。

客観的な認識

児童の個々の間を交流した主観が言葉によって客観化され社会的に仕上がる。

3 集団の以前に個

個がなかったら集団は成立しない。学習は集団がするのではなくて、集団の個々がするのである。ところで、指導者は学習集団を配慮しすぎて、学習者への配慮が不足しがちになりやすい。これは集団が全体として発展するための秩序から個をながめ、個を組織づけるためであると思われる。そして、個の主体化が問題になってくるのである。

個々は自分たちの主体性がいかせる秩序が作れ、自分たちの集団の発展方向が見きわめられる力量をつけなければならぬ。バズ学習では学力と人間関係の向上が同時達成できるという。そのためには、集団に埋没しない個の確立が前提になっていなければならない。

バズ以前の実践 —— 個の確立のために ——

- (1) 学習過程での発問はすべての児童が考えられるものとする。
児童は何にでも主体的に取り組めない。(学習意欲)
- (2) 板書量に注意をはらい、記録は学習過程の最後にする。
児童の認識できる量には限りがある。(集中力)
- (3) 国語の時間割に「話す」を導入する。
児童は生活経験を「なかみ」にして話す。(表現の習熟)
- (4) 生活作文の見直しをする。
児童は真実をありのままに表現できる。(個の理解)

個をきたえることにより、「みんなが話せる」「みんなが発表できる」を可能にした。児童は「みんな」を意識する。個の主体化は高まって、「わかりません」「なぜですか」の声が多くなった。個と個の関係は縦から横への色あいを強めてきた。

4 バズ学習が起こす変化 実践の考察

(1) 学習過程の変化

教材研究	<p>教えたいことの論理・系統をつかむ。</p> <p>バズ学習の中心課題を設定する。</p>
準備課題	<p>前時の中心課題と本時の中心課題につながりをつける。</p> <p>学習活動を成立させる条件を備えた課題を提示する。</p>
中心 業 団 心 課 題 表	<p>個人思考</p> <p>私間巡視をして作用効果を把握する。</p> <p>個がバズに参加できるか。思考の確立を認知する。</p> <p>タイミングが問題。</p>
	<p>話し合いがたやすくできる。(言葉の交通)</p> <p>〇〇君の考えが参考になった。(みがき合って客観化)</p> <p>ぼくの考えもみんなが聞いてくれた。(連帯)</p> <p>子どもの思考で話し合っているから児童にはよくわかる。</p> <p>なかまの学習態度を相互に点検している。</p> <p>教師は事実についての多角的な見方を示唆する。</p> <p>タイミングが問題</p> <p>(動から静への変化)</p>
	<p>似た内容でも繰り返し発表する。(何回か開けてちがいに気づく)</p> <p>班と班のかかわりを作ってもらいあげる。</p> <p>リーダーとフォロワーの関係は作らない。</p> <p>話す・聞くのルールを身につける。</p>
	<p>確認課題</p> <p>教師は補足・修正・まとめをする。(知的KR)</p> <p>教師は学習活動についての感想を述べる。(情的KR)</p>
記録	<p>認識内容をまとめる。</p>

(2) 児童観の変化

(3) 私は、児童が本当によくわかるためには教師の論理的な説明が何と書いてもいちばんだと考えていた。これには、児童への通小評価があり、自己への過信があったことを実践によって反省させられた。児童には子どもの思考形式による相互批判や自己批判が最もふさわしかったのである。学習活動を成立させるにたる適切な課題であれば、「教師が教えたいと思う程度のことは児童が自ら学べる」ということを確信することができた。

(4) バズ集団はリーダー中心になってしまうのではないかという大きな疑問もあった。実践をすすめるうちにその疑問は解消してしまった。真実をたえられている児童は班を作っても決してメンバーの「たれか」に依存しようとはしない事実を児童が証明したからである。わかりにくい子を大切にするというのは実はよくできる子を意識しすぎたことだったと気がついた。リーダーとかフォロワーとかいった論は個の確立によって解決できるのではないだろうか。

(5) 学習集団としてのまとまり方が変わってきた。「〇〇さんはかしこいから」ということで、〇〇さんの意見によってまとまることになっていた体制が変化してきたのである。自分の考えを個々にもっている児童は「なんで、なんで」と言って自分の考えをより確かなものにしようとしている。〇〇さんは考えるということをもっともっと意識的にするようになって、論理的な考え方がみんなによってのばされている。きたえられた個によって集団がきたえられ、きたえられた集団によって個がさらにきたえられているのである。学習集団の相互関係は真理を追求することできびしいものになってくる。こうした児童の学習活動に接して、私は初めて学習集団のあり方を見直すことができた。

(3)人間関係の変化

バスは、とがりどうしの話し合いから班での話し合いに広がる。児童は必ずだれかと話し合っていることになる。たとえつたない考えであっても友達に自分の思っていることを述べることになり、聞いてもらえることになる。話のなかみがかくても深くても、せまくても広くてもである。むしろそれだから、児童はお互いになかまの物の見方や感じ方に直接ふれることができる。このふれ合いから、自分の考えを聞いてもらえた喜びから学習のきびしさの中に連帯をしみじみ感じとれる。ここにバス学習の本質があるように思えてならない。連帯は共通目的に向うためのきびしさを意識させることができなかつたら育てられないと思う。児童は「私たちの班は……」という連帯を口にできる。個は話す「なかみ」をもつことを達成して、集団の中で「なかみ」が出せることをバス学習は保証している。このように集団と共に発展している個の主体性を競争をもちこむことによってこわしたくはない。期待したいことは、今度はもっとすばらしい考えを聞いてもらおうとひとりひとりが考えるということにますます意識的になってくることである。

バス学習は児童が机をかこんでいる。そして、子どもの思考で子どもの言葉で気楽な話し合いが可能にされている。しかし、そこでは児童が顔を見合わせて互いの学習態度をみつめていることにもなっているのである。このみつめ合いは児童のいろいろな生活場面にも及ぶことになる。そして、話ができるという連帯はなかまの生活ぶりについても語れるという結果を生んだ。それが学級集団の生活を高めることになって表れる。バスによる学習指導はこのような意味において児童の生活の向上も同時達成しうるのではないだろうか。

第15回 全国バズ学習研究集会

子どもが創る算数

バズ学習の実践を通して

愛知県春日井市鷹来小学校

田川正樹

1. 研究主題とその要旨

子ども達は、素晴らしい考え・疑問をもっている。この子ども達の持っている力をひきだすことができれば、それだけで授業は成立する。子ども達にとっても、自分達で話し合い「あーでもない」「こういのはどうだろう」と知恵を寄せ合って、算数を創っていくことは、楽しいことであると思う。

子どもが創る算数とはいっても、もちろん全く新しい算数を生み出すのではない。ひとりひとりが、自分の考えを持って自分なりに課題にとりくみ、話し合いを進め、深め、あたかも、自分達で創ったかのごとく、算数を創造することである。

しかし、日々の現実をながめてみるに、児童は、課題を自分の問題として思考しようとせず、答のみを問題にし、それも「あたった」「はずれた」とまるでクイズ番組のごとく、教師を落胆させる者が少なくない。

ところで、上記のように“創る算数”をとらえるなら、それは必然的に小集団学習を必要とするのではなかろうか。なぜなら、構成員相互のはたらきによって、各種の角度から切りこみ、解決へと導く場面において、とくに多面的な創造的思考が生まれるものであると思うからである。

このように考え、バズ学習の実践を通して、“創る算数”に迫ってみた。

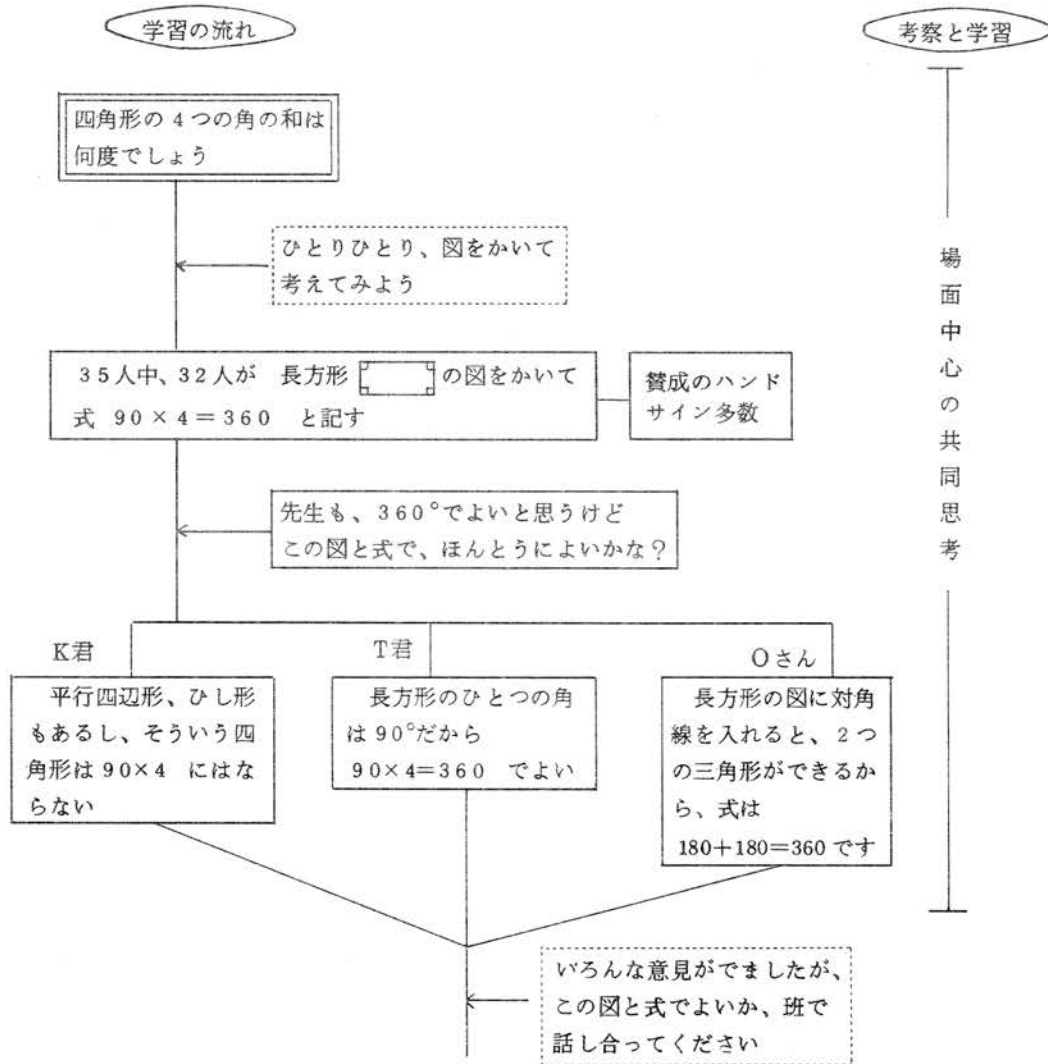
2. “創る算数”指導上の工夫

- (1) どの子どももまちがいをおそれず発言できるようにするため、学級の好ましい人間関係の育成に努力する。
- (2) ひとりひとりの考えを大切に、又、できるだけ多くの考えが発表されるように、ハンドサイン（賛成・反対・つけたし）をとり入れる。
- (3) バズ長・バズメンバーの発言の基本型、話し合わせ方、発表の仕方などを段階的に指導する。

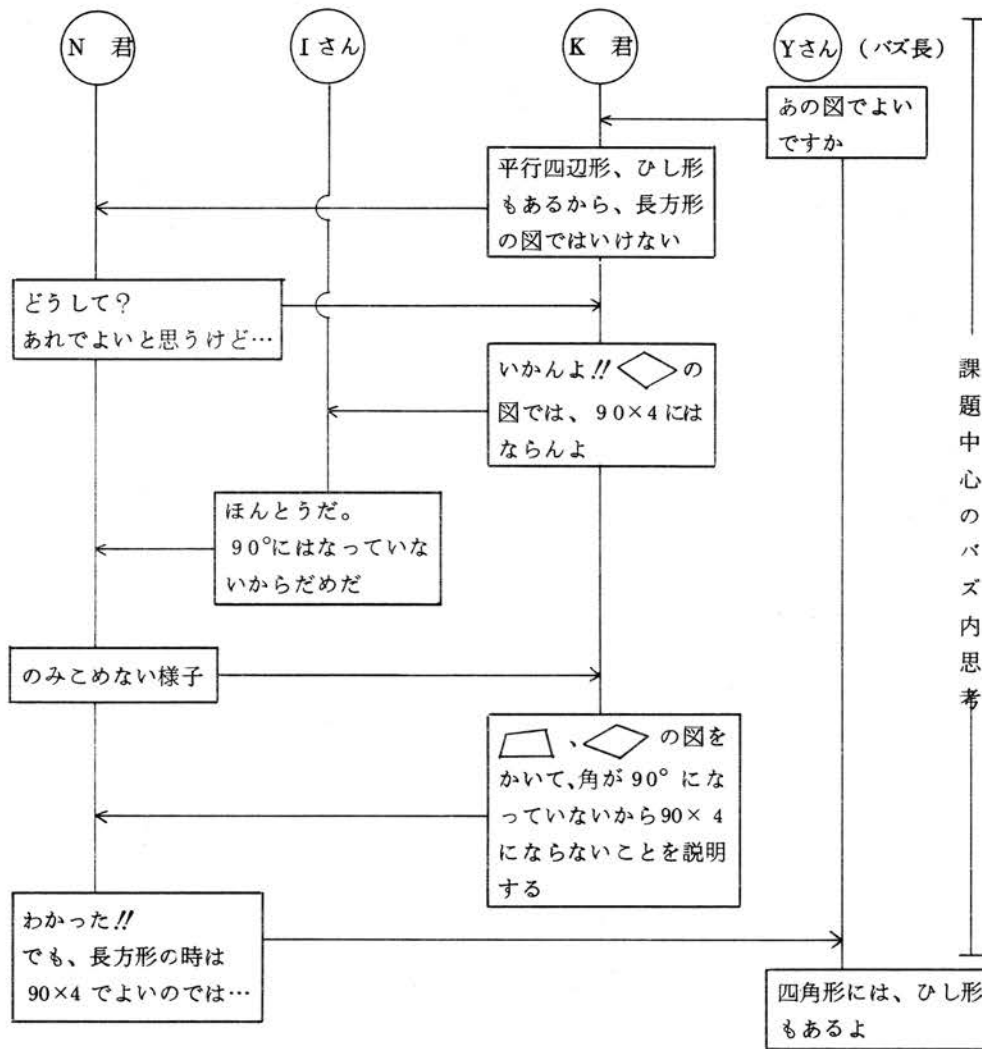
- (4) 授業の終わり数分を使って、「三行感想」(新しくわかったこと、わからないところ、授業の感想などを三行程度にかく)をかかせる。児童ひとりひとりの声を聞き、個別指導、次時の授業の組み立てに役立てることをねらったものである。

3. “子どもが創る算数”指導実践例

次の例は、第5学年で実施したものである。授業は「四角形の内角の和を求める」ことをねらいとして、展開したものである。




ここでバズによる話し合いが始まったので、バズの活動に目を移す。
 その中で、K君のいるバズを取りあげてみることにしたい。



ここで、話し合いは中断する。一斉授業にもどし


長方形の時は、 $90 \times 4 = 360$ で説明はつくが、平行四辺形やひし形ではいけないことを確認する。

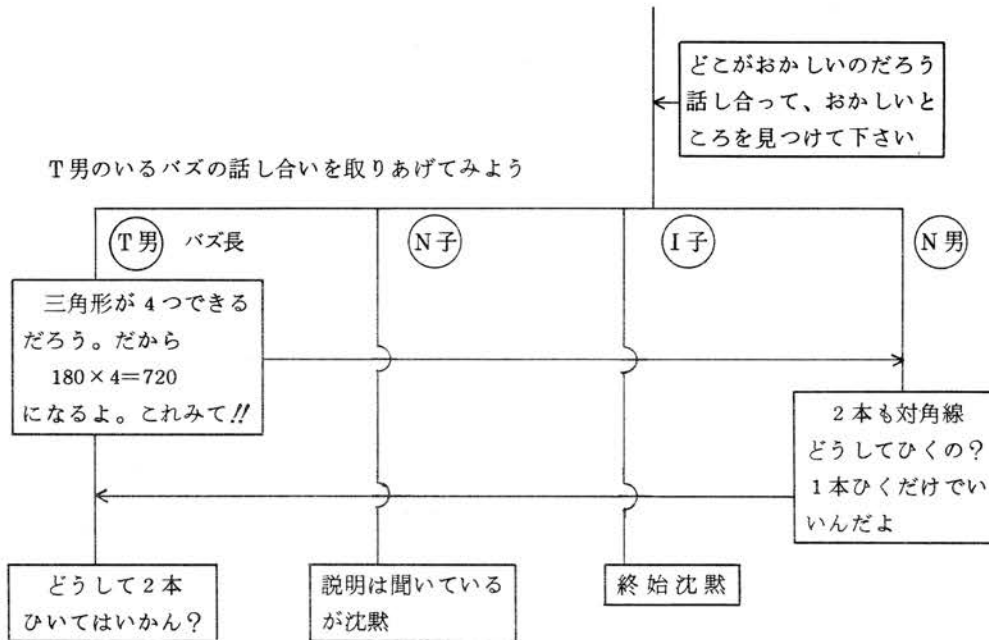
 の図で、4つの角の和を求める式をつくってみよう

自分だけで考えて下さい
3分間!!

O さん
板書して対角線を入れると、
三角形が2つできるから
 $180 \times 2 = 360^\circ$

賛成のハンドサイン
20余名

T 男
 を板書し、三角形が
4つできるから
 $180 \times 4 = 720^\circ$ になってしまう



ここで対話がとぎれる。一斉授業にもどし、対角線の交わっている角度は、4つの角にはいっていないことを確認し、 $720 - 360 = 360$ をおさえる。

(以後略)

4. 児童の三行感想

M 君……今日は  の図での説明がよくわからなかった。もう一度やってほしい。

S バズ長……今日は、みんなも、ぼくもよくできた。

O さん……F君が少しふざけて、うまく話し合えなかったので、ほんとうにわかったか心配です。

N さん……少しわからなかったこともあったけど、班の人におしえてもらってわかった。

N 君……よくわかった。あしたからは、三角定ぎを忘れないようにしよう決心した。

簡単な感想であるが、教師にとって役立つことは多い。

- まず、
1. 児童が、どの程度理解できているか、即時評価につながる。
 2. 従って、次時の授業の組立てに役立つ。
 3. 児童にとっても、今日ならったところを、ひと通り思いうかべなくてはいけないし、家庭学習にもつながる。

第15回全国バス学習研究集会

学習意欲を高める班活動のくふう

愛知県春日井市立勝川小学校

佐橋修吾

1. 児童の実態と指導方針

年度	53年度	54年度	55年度
児童	6年	4年	5年
四月当初の児童の実態	<p>(担任持ち上がり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バス学習に慣れ、活発な話し合いができている。 ・交友関係は円満であり、落ち着いた生活態度である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中に勝手な言動が目立ち、じっと席に座っていない子がいる。 ・自分勝手なことをする子を注意する子が少ない。 ・学級のまとまりに欠ける。 ・忘れ物が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級編成をしたためか、妙に遠慮をし、遅効・学習に活気がない学級である。 ・温和な性格で、教師に従順である。 ・宿題忘れが多い。 ・話し合いに慣れていない。
指導方針	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で、自主的な学習態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童と教師の人間関係を密にする。 ・児童同志が触れ合う場を数多く設け、仲の良い学級集団にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何事にも積極的に取り組む態度を養う。 ・物事を深く考える力を養い、自分の意見をはっきり発表できるようにさせる。

2. 生活・学習態度の目標を持つ。—— 班目標

- ・5.53 月ごとに目標を決める。
- ・5.54 月ごとに目標を決め、三段階評価をする。
- ・5.55 毎日、目標を決め、三段階評価をする。
 - ・4月当初 班ノートに目標を記入し、班で自己評価する。
 - ・6月 「表」に目標を記入し、班で三段階評価のシールをはる。
 - ・6月下旬 班での評価を 教師及び学級全員で確認する。

- ・ 9月 守れない日のときは、次の日も同じ目標を続ける。

○ 班目標の効果

- ・ 班員がまとまって、目標達成をめざす。
- ・ 自分達で決めることから自主性、積極性が出、また責任感を持つ。
- ・ 教師が日々児童に注意している事やその日の行事等に関する目標が多い。

○ 教師の指導

- ・ 評価は客観的な「厳しさ」が必要であり、班での自己評価に対して批評や賞賛をして、目標達成への意欲をさらに高める。

3. 授業の中での班活動

○ 班の構成

- ・ 4人グループ 男子2名女子2名。
- ・ 班長・副班長は行事的なことのリーダー、配布物の確認等が主な役割である。

○ バズの方法 (自由会話法)

- ・ 司会(バズを深める係)は、1時間ごとの輪番制としている。班員誰もがバズに参加し、内容をは握させたい。
- ・ 司会者は全員の意見・考えを聞き、バズ内容をまとめる。
- ・ 班指名の発表のときは、司会者が行なう。
- ・ 班員は「〇〇君と同じ」ではなく、「〇〇君と同じで、～です」と発言する。考えの根拠を重視する。
- ・ バズの前に、各自が考える時間を必ず与える。

○ 「がんばり表」の活用 — 算数科

- ・ 課題 → (個人思考) → (班バズ) → (全体での話し合い) → (教師の補正・修正) → (まとめ)。
課題ごとの学習が深まり、確かに理解したかを認識させるために、小テストを行なう。
- ・ 10点満点とし、表に得点を記入させる。得点で理解度を知らせる。
- ・ 時々、班ノートで班全員で解かせる問題も出す。
- ・ 6点くらいをめどにし、合格点以上が全員だった班をバズが良かったとして賞賛する。
- ・ 原則として、1授業で満点にする考えだったが、そうでない場合が多い。

第15回全国バズ学習研究集会

相互活動の充実と多様な思考の育成

——主として算数の授業における試み——

愛知県春日井市立北城小学校

丹 羽 茂

1. はじめに

新設校である私の学校では、「ひとりひとりを生かす授業法の研究」をテーマとして現職教育が出発した。バズ学習に根ざす授業研究もまた揺籃の域を出ないが、一歩一歩のあゆみを見せつけてはいる。バズ学習の真髄が雲の上にある私には、多くの課題が山積みされ、暗中模索の中でこの機会を得たわけである。

ここでは、多少なりとも積み上げた微々たる算教科指導の実践例を発表することにした。

ところで、算教科指導では、特に私たち教師の悩みとは裏腹に、「おちこぼれ児童」といわれる子たちを、私たち自身が生み出しており、この現実を見すごすわけにはいかない。高学年においては、それが極端な算数嫌いになっていくのは周知のごとくである。

そこで、ひとりひとりを生かし、思考を育てる学習を推し進めるために、バズと即時評価に着眼して、児童が生き生きと授業に参加できるように研究の視点を向けた。

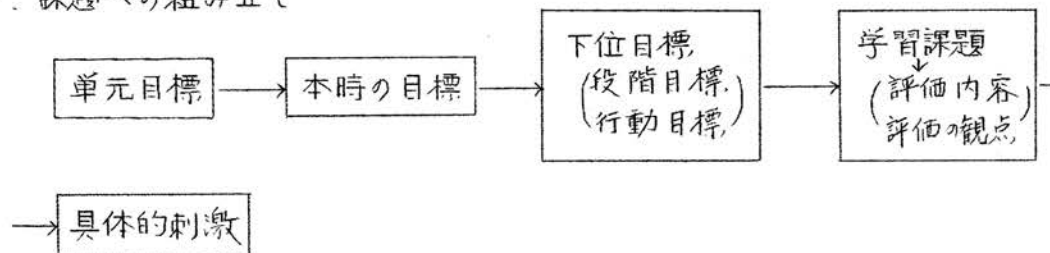
2. 授業の組み立て

Ⅲ. 目標の分析

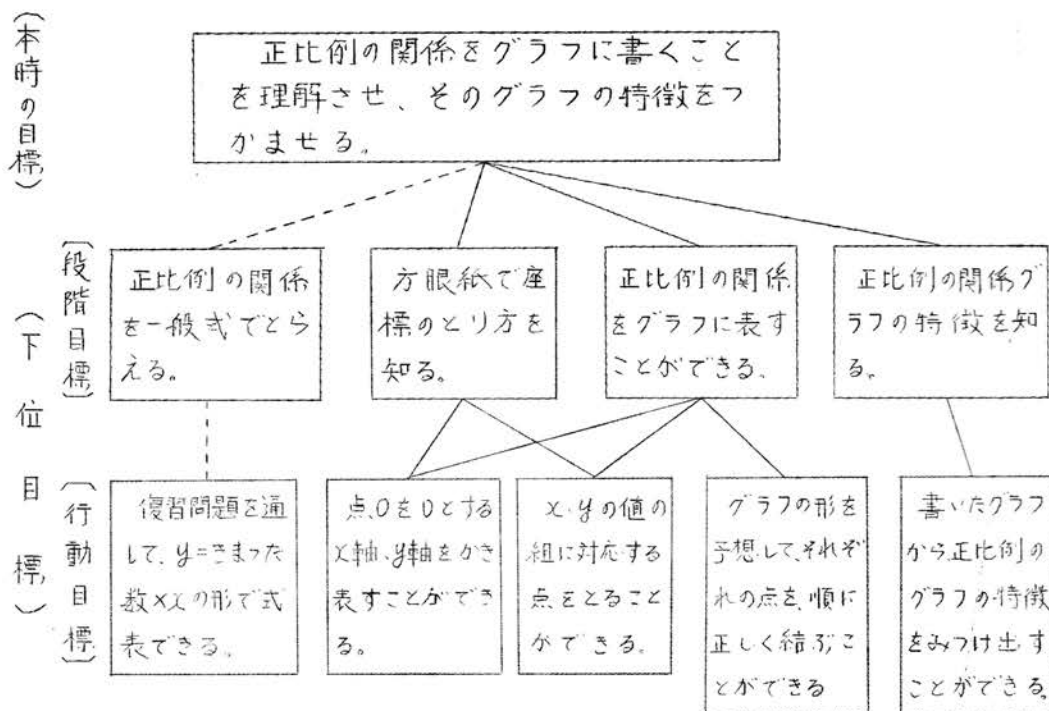
単元全体の見通しを立て、1時間1時間の授業をどのように組み立てていくかは容易なことではない。そこで、まず1時間の授業の目標を明確におさえるように配慮した。そして、本時の目標の要素を指導過程の中で、

どのような手順で、どのような児童の活動によっておさえていくかを明らかにする糸口として、下位目標を的確に位置づけるように心がけた。

①. 課題への組み立て



②. 下位目標の設定 (具体例)



(2). 指導過程の検討

算数教科において、思考を育てるには、課題を解決する過程を重視する中で、算数的なものの方、考え方、処理のしかたなどを伸ばしてやるのが特に大切に思われる。

子どもたちにとって、正答を得ることはどんなに大きな喜びであること

が、だが、解決の手だてに誤りがあっても、ヤマカンで得た正答に喜びを感じる子どもがいたとしたら、教師の大きな反省材料になる。

また、課題に対して、算数嫌いな子、基礎学力の欠ける子などに、どのようなかわり合いをもたせるかも重要である。学力格差を越え、できる子もできない子も同じ意識をもって課題解決にあたることは可能であり、これが全体の共通問題意識となる。

そして、このことは、学習問題成立の過程でなされなければならない。

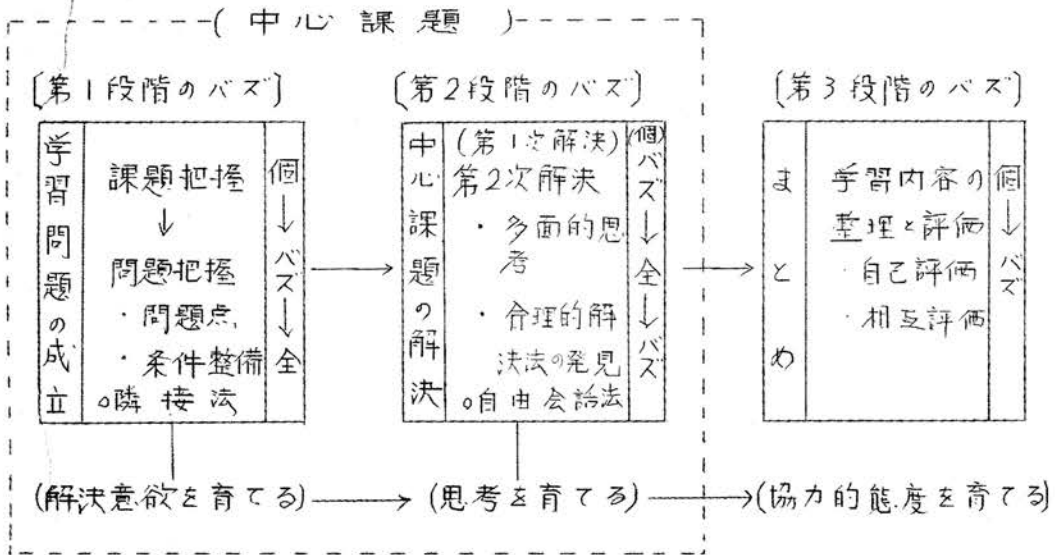
つまり、中心課題の問題把握の段階を重視して、ひとりひとりに学習が成立する状況を充たすように配慮しようとするものである。

そのために、ここで第1段階のバズの場を設定した。ひとりひとりの学習の成立は、個別学習によってのみ達成されるのではなく、子どもたち同士の相互活動による相互作用によって、より深化される。もちろん、教師と子どもの相互作用も加わってのことである。

さらに、第2段階のバズの場を、中心課題の問題究明過程で設定し、第3段階のバズの場を、確認課題後の全体のまとめ段階で設定した。

では、それ以外の場面では、班の話し合いをさせないかというそうではない。必要に応じて他の場面でもするわけであるが、ただ無作為に班の話し合いを多くすれば学習効果があがるというものではない。そのために、主に3つの場面で、それぞれのねらいをもって相互活動をさせようと思図したわけである。

指導過程におけるバズの主な位置づけとして、図表であらわすと下記のようになる。



3. バズへの一歩

本校のように、学校全体がバズ学習を授業に導入していきこうとする段階では、学習態勢を整えるための基本的なルールを統一することが必要である。

そこで、バズ以前の問題として、授業が成立するための基本的条件を討議する一方、ハンドサインを統一したり、バズの必然性について話し合ったりして、バズ学習への方向性を見い出している。

次にあげるバズの実際例は、初歩的な段階で、テーマにどのようにせまるかを考え、重視したものである。

(1) バズの進め方

① 隣接法

ア、題意を把握する中での、問題点や条件整備を行う過程で、主に用いるようにする。

イ、全員思考を促し、短時間で能率よく話し合わせろ。

ウ、相方が、聞き手、話し手のワンサイドに陥らないようにする。

エ、話し合いのはやくついた班は、4人バズに切り替える。

② 自由会話法

ア、輪番法による発言を強導していく。

イ、全体討議における班の話し合い結果の発表を義務化する。

③ バズ後の個人の発表

ア、班での発言を通して、自分の考えがまとまるようにする。

イ、全体討議の前での発表のステップとする。

④ 机間巡視

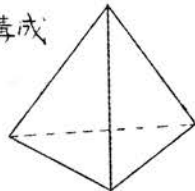
ア、各班の状況を十分にキャッチしておいて、全体討議の重要な資料とする。

4. 即時評価の方法

(1) 反応器の利用

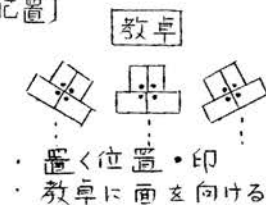
授業中の評価方法として、観察、発表、ハンドサインなど多岐にわたるものがある。授業でのあいまいな点を解消し、無駄な時間を省き、より具体的、より効果的に学習を進める一方法として、三角すいを利用してきた。

① 三角すいの構成



- ・ 1辺が10cmの正四面体
- ・ 白、青、赤、黒の四面

[配置]



②、使用目的

- ア、学習活動の進度状況を早く知る。
- イ、正答、誤答率を把握する。
- ウ、わからない子、班を早く見つけ、指導を加える。

③、使用方法

- ア、学習作業中、使用しないときは、白の面を向ける。
- イ、学習作業がおえたら、青の面を向け、教師は進度等を考慮する。
- ウ、学習作業中につまづいたり、わからなくなったとき、質問したときには、赤の面を向け、教師の指導をうける。班の中のできた子に教えさせるように指示することもある。
- エ、班の話し合いがに詰まった場合には、黒の面を向ける。やむえず教師の力を借りたときは、赤の面を向ける。
- オ、正答数をつかみだしたとき、教師の指示により、正答は青、半分正答は白、誤答は赤の面を向ける。

同様に、ノートに行く全体評価、○、△、×を、青、白、赤の面であらわす。

④、使用上の利点

- ア、ひとりひとりの作業状況や時間の目安がつき、個別指導や授業を進める上での尺度に有効である。
- イ、意志表示が抵抗なくできる。
- ウ、正答、誤答率の把握が挙手よりも確実である。

⑤、問題点

- ア、反応器は、子どもの自己評価に委ねる面が多く、信頼性に多少の問題が残る。
- イ、使い慣れさせるまでに時間がかかる。
- ウ、こわれやすい。(こわにフロッタは、厚紙や板でつくらせること、自分でつくらせることでの勉強で、マイナス面を補っている。)

(2)、ノート評価欄

学習ノートを有効に活用させることにより、学習の構え方や理解度も大きく変化するという信念のもとにノート指導を実践している。右のようなノート形式にし、評価欄をもうけている。

1時間の学習活動の中で、子どもたちが、

(学習ノートの形式)

ページ・問題番号欄	板書欄	評価欄	思考欄
	立式欄 (図式)		
	○・△・×		

自己評価、相互評価したものを、具体的にノートに記入する。

例えば、3問中正答が3つの場合(基準は70%以上)は、○印、2つの場合(同じく70%未満~40%以上)は、△印、1つの場合(同じく40%未満)は、×印を評価欄に記入する。おまに、立式回答は、自分で評価し、図形、図式、グラフなど、自分で評価しにくいものは、グループで相互評価したりする。

そして、小單元あるいは1時間ごとに、それをまとめて全体評価させる。全体評価は、部分の即時評価を集約し、○、△、×のからみでし、部分評価の黒鉛筆と区別して赤鉛筆で行う。

①、活用上の利点

ア、子ども自らが具体的に評価することにより、1時間の学習理解度がある程度つかみとることができ、評価する喜びが、意欲化を促し、問題意識を育てる。

イ、個々の学習理解の状況が、容易につかめ、事後指導にも役立つ。

②、問題点

ア、○、△、×で評価するため、形式的な面に陥りやすい。

イ、評価をさせるのに手まどり、授業の流れが悪くなる。

これにフッては、以前は教師の指示により部分評価もさせていたが、指示しなくても自分ですぐに評価するように習慣づけ、多少の適確性は欠いても、各自が抵抗なく喜んで評価するようになり、それに伴って時間的な手間も省け、問題点もかなり解消できている。教師自らが、結論よりも思考過程を重視するというある種の価値観をぶつけていくことにより、子どもの自己評価は積極性を増すものであることに気付いた。

(3)、目標到達カード

学習と評価を一体化し、学習の充実と深化をより一層進めるために、ありふれたものではあるが、目標到達カードを新たに作成し、実践を試みた。

①、カードの形式

＜算数＞		目標到達カード		氏名
題材	到達目標	自己評価	知識・理解を深める言葉(相互) (活板)	
6 比 例	表の見方を考え、ともなって変わる2つの量の関係 をつかむことができたか。	○		
	正比例の意味が理解できたか	△		
題材事後感想				

②. 到達目標と自己評価

題材全体を概観し、1時間ごとの目標、課題に応じた到達目標を設定し、授業の終わりに3段階の自己評価をするようにした。到達目標は、細分化をさせ、明確なものにした。

③. まとめの欄

授業の最後に、相互活動によって協力しながら、本時の学習内容のポイントをつかませ、学習の進展が円滑になされるように、まとめの欄をもうけた。知識、理解を深める言葉、きまりなど、自分で必要と感じたポイントを、学習過程で自由に記録し、最後に相互活動で補足し合うようにした。このことが、思考力助長の手立てとなり、協力することにより、人間関係がより深められることをねらった。

④. 題材事後感想

題材全体を学習しおえた段階で、感想、意見、反省点などを自由に書かせた。帰りの会に書かせたり、家庭作業にしたりして、記載後に回収し、点検チェックした。

⑤. 使用上の利点

- ア、ひとりひとりの子どもの学習目標達成度が、自己評価によって、おおよかながら把握できる。
- イ、到達目標の自己評価によって、子どもの課題意識が高まる。
- ウ、まとめの欄によって、筋道を立てて考えたり、発表したりする力を補助的につけることができる。
- エ、題材事後感想によって、題材全体を通しての興味、関心、意欲など、内面的なものがチェックできる。

5. おわりに

テーマにせまるには、十分な実践研究とはいえず、今後多くの課題が残されたように思う。特に相互活動による学習効果が、十分に高められる段階には、まだまだ至っていない。班を毎日の学校生活の中で意識させるために、教科指導以外にも、班ノートや短学活のミニテストによる班競争、班ごとのサーキット・トレーニング等も実施している。それが、班の協力態勢とか話し合いの能率化といった学習面への影響としても、遅々たりとも期待している。

また、即時評価については、ノート評価欄、目標到達カードの自己評価が二重手間にもなり、取り扱わせ方に再考の余地がある。

中学・高校の部

第15回全国バズ学習研究集会

「思考を大切にした社会科の授業をめざして（公民的分野）」

—より効果的な課題づくりを通して—

愛知県春日井市立藤山台中学校

教諭 熊谷一文

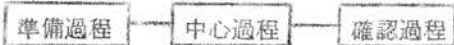
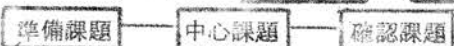
1. はじめに

新指導要領の改訂にともない、「ゆとりある、しかも充実した授業の追求」が、強くうち出されたが、1時間、1時間の授業の中でどうあればよいのかを適確にとらえることは容易なことではない。「ゆとり」には、量的（時間的）なゆとりと質的なゆとり、そして、人間的なゆとりの3つの次元があるといわれている。すなわち、時間的なゆとりがあっても、そこで何をするかということしかも、どんな人間をめざすかということが見通されていなければならない。

これまでの社会科の授業では教材の精選という問題に取り組んできたわけであるが、生徒たちからは、いわゆる暗記科目のレッテルを貼られ、暗記の苦手な生徒から敬遠されがちであった。とくに、中学3年生の公民的分野では、生徒たちの生活経験が浅いため、教師の一方的な授業とならざるをえない面が多く見られた。そこで、生徒ひとりひとりが意欲的に授業に取り組み、お互いの疑問や意見を卒直に出し合い、高め合う授業のポイントは課題の設定にある。課題は、その良し悪しで授業が決まるといえるほど重要なものであり、これなくしては授業も成立しないし、学習も存在しない。

公民的分野の授業では、できるだけ生徒の生活経験を生かし、身近な社会事象の中から課題を設定することによって、知識・理解よりも、生徒がその課題をいかに自分のものとしてとらえ、考えを進めていくかを把握しながら、生徒相互の高め合いが、どのように行われるかに重点をおいて、主題に迫りたいと考えた。

2. 授業の流れと課題の位置づけ

バズ学習では、生徒が主体的に活動できる場が確保されているので、授業展開においても、生徒が本時の目標を達成するための中心となる過程、そして、そこへ至るための準備として基礎的事項を確実にしておく過程、また目標の達成を確認し、次時への足がかりをつくる過程といった具合に生徒の活動に力点を置いている。それは、となり、それぞれの過程に、において、その課題を解決させる

ことによって、目標達成をめざしている。

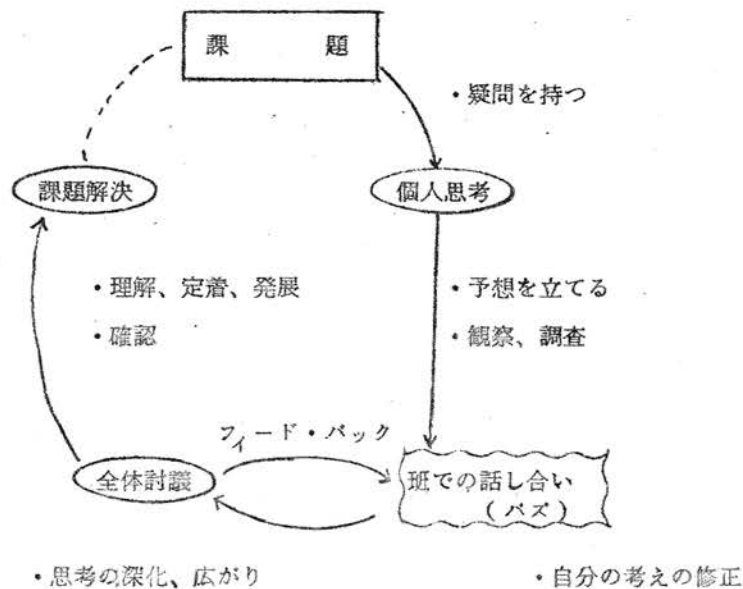
社会科における課題解決のための一般的な思考過程として、次のようなものが考えられる。

- ① 社会事象と当面し、対話を持つ。(始動) — 提示
- ② 自分では、わからないことがらに疑問を持つ。(学習意欲)
- ③ たぶんこうではないかと考える。(予想)
- ④ 学習資料をもとに考えを確かめる。(観察、調査)
- ⑤ 疑問と調べた事実を照らし合わせる。(修正、理解)
- ⑥ わかると納得する。(確認、定着、発展)

これを授業の流れをもとに図示すると次のようになる。

【 課題解決のためのパターン 】

それぞれの過程において、



これは、あくまでも原則的な流れであって、課題の内容により、個人思考にじゅうぶんな時間をかけたり、全体での話し合いにじゅうぶんな時間をとったりして行いが、個人思考や班の話し合いにだけ終始するのではなく、そこでも教師の指導がじゅうぶん反映されなければならない。

3. 実践とその考察

公民的分野における「経済生活」の会社と企業の関係、価格の決め方と生活、貨幣と銀行、財政と税金とのつながりなどの単元で、生徒が日ごろよく見聞きして身近に感じているが、明確でない断片的な知識にゆさぶりをかけることによって、生徒たちが意欲的に授業に取り組むであろうと考え、準備課題(動機づけ)、中心課題(思考の深まり)を中心に実践し、課題の有効性を考

察してみた。

(1) 効果的な準備課題をめざして

「企業とは何か、企業の種類について理解させるための課題」

生徒たちは日常生活の中で、大企業、中小企業ということばはよく聞いて知っているが、自分たちの生活との関連ではあまり考えたことがないと予想される。また、生徒たちの企業についてのイメージは、大きな会社、すなわち、トヨタ、三菱、三井、住友などの私企業であり、公企業である国鉄や電々公社、個人企業である農家や身近にある個人商店などは、まず企業と考えないであろうと考えられる。だとしたら、日ごろよく見聞きしているそれらの企業を列挙し、生徒の考えをゆさぶることができるであろうと考えた。

◎次の中で企業といえるものを選びなさい。

- ・中部電力 ・春日井市民病院 ・国鉄 ・中日ドラゴンズ
- ・農協 ・ユニー ・名鉄百貨店 ・トヨタ ・農家
- ・サラリーマンの家庭 ・楽々亭 ・電々公社

この課題を与えるときは、教科書、資料集などはすべて閉じさせておき、ひとつ、ひとつ黒板に書いていった。日ごろよく知っていることばが出てきて、さて、何が始まるのだろうと生徒の興味関心は高まってきた。中日ドラゴンズや楽々亭(学校の近くにある中華料理店)を書いたときは爆笑が起こった。そして、最後に問いを書いて生徒にぶつけてみた。初めのうちは「簡単だ。」という声も聞かれたが、企業についてのこれまでのイメージとのずれがあり、いざ構えてみるとむずかしいとみえて、いっしょうけんめいに考え始めた。(個人思考2分)

T 自分の予想したことをもとに班内でバズを行いなさい。班長はその理由も発表させ、全員の人が意見を言えるように話し合いを進めなさい。

- A 病院や国鉄は絶対企業ではないな。市や国が行っているから。
- B ドラゴンズも違うと思うな。野球だから。
- C 中部電力は会社だから企業といえると思う。トヨタもそうだ。
- D でも、中部電力は電気だから違うのじゃないかな。
- E トヨタ以外は違うのじゃないかな。イメージ的に。

等、各班ともいろいろな意見が出て、バズは活発に行われた。

このあと、全体発表、討議という流れで授業を進めていったが、生徒たちの意欲も高まり、次の企業の種類もスムーズに理解できたと思う。

この課題は、

- A だれにも取り組める課題であること。
- I 身近なところから選んであること。
- ウ 生徒の企業に対するイメージのずれがあること。

エ いろいろな種類の企業が含まれていること。

オ 課題に具体性があり、何をしたらよいかははっきりしていること。

などの好条件があり、生徒の興味、関心を高めるには効果的であったと考える。

(生徒の感想)

生産について何も知らない私は、今まで勉強して初めて知ったことやびっくりしたことがたくさんありました。びっくりしたことのひとつで、企業のところで、先生が黒板にたくさんいろいろなところを書いて、これは企業かと言われて考えたとき、農家も企業に入っていたことにとってもびっくりしました。……

(2) 考えを深めるための課題の追求

1つの課題を解決しようとする過程で、今まで知らなかったこと、気づかなかったことが、見えてくることがある。生徒たちにはややむずかしいかと思われたが、これまでの学習を基盤とすれば必ず解けるだろうと考えられる課題を次のように設定してみた。

「財政政策と景気の変動との関連を理解するための課題」

◎国の予算は、不景気の時大きくした方がよいか、小さくした方がよいか、考えよ。

この課題は、教科書や資料集のどこを手がかりにして考えたらよいかは生徒には、わからないであろうが、財政の考え方、税金の仕組み、景気の変動とインフレーション、貨幣の流通量の増減などと、これまでの学習を想起して考えれば、そんなに困難な課題ではないといえよう。

しかし、生徒たちにとっては、難解な課題となった。それは、国家予算なるものが身近なものとして考えられないこともむずかしさにいっそう拍車をかけたものといえよう。そこで、個人思考にじゅうぶんな時間をかけるとともに、必ず自分の考えを持つことと、根拠をはっきりさせて説明するよう指示した。

生徒は、教科書を参考にしながら考えていたが、なかなか結論が出ないらしい。解決の欲求を感じてか、隣とボソボソやり出したので、個人思考(5分)を打ち切り、班バズに切りかえた。

F 景気が悪いから小さくする方がいいと思う。税金が入ってこないから。

G でも、そうしたらますます景気が悪くなるじゃないのかなあ。ぼくは、理由はよくわからないが、大きくした方がよいと思う。

H でも、税金が入ってこないのに大きくしたら、困るのではないかなあ。

I やっぱり、景気の変動のとき勉強したように、政府は景気の悪いときには景気がよくなるように努力するから、大きくすると思う。

など、かなりいい線まで深まって話し合いが進んでいる班もあり、もう1歩のつっこみを期待した

が、理由づけがかなりむずかしいようであったので、教師が補足説明をした。

この課題は、中学生にとっては、かなりむずかしい課題であるが、教師の提示の工夫によって、もっと思考の深まりや広がりができ、生徒たちの力で結論までもっていけるものと思われ、この課題によって財政のはたらきがより理解できると考える。

4. まとめ

課題の良し悪しは、すぐ生徒の反応にあらわれる。社会科の場合は課題の材料が、地図、グラフ、統計資料、新聞、雑誌等、日常生活に豊富にあり、それをどう生かしていくかは、日ごろの教材研究と実践を通してつかみとるしかない。

また、どんなによい課題であっても、そのクラスの人間関係がよくないとその課題の効力を発揮できない。生徒たちに、「わからないから学習するんだ。」「まちがいを恐れずどんどん発表せよ。」「○○さんのまちがいで、みんなはわかったんだ。」「まちがいは宝である。」の感覚を植える努力が必要である。これは課題の生かされる舞台であり、土壌だからである。

5 問題提起

(1) 生きた課題となるための条件とは何か。

(2) 身近な社会事象の何を、どのように授業に生かしていくか。

(3) 話し合い活動を行わせるにふさわしい課題とは何か。(ゆさぶり)

(4) 評価をどのようにしていくか。

(5) 難解な語句の指導をどのようにしたらよいか。

学力と人間関係の同時達成をめざして
—— 学習集団づくりを基盤に ——

愛知県春日井市立東部中学校
堀場 正美

1. 目 標

自己認識から集団認識へと高め、班活動を通して生活集団・学習集団を確立する方法を実践的に研究する。

2. テーマ設定理由

本年度の本校現職教育の主題が「ひとりひとりを伸ばすバズ学習の実践—課題と評価をとおして—」と設定された。

ひとりひとりの生徒をのばすために、最も大切なことは学級が単なる集団ではなく、ある共通の目標に向かって援助したり、競争したりして、お互いに高め合うことができるような学習集団を確立することにあると思う。一年においては、自分の気持ちを気軽に話したり、お互いに協力したり、励まし合ったりして学習する習慣が身についていないため、直ちに授業の中に相互活動を取り入れることが困難な状況にある。

そこで、先ず生活集団づくりからはじめ、その成熟を基盤に学習集団づくりをはかった。

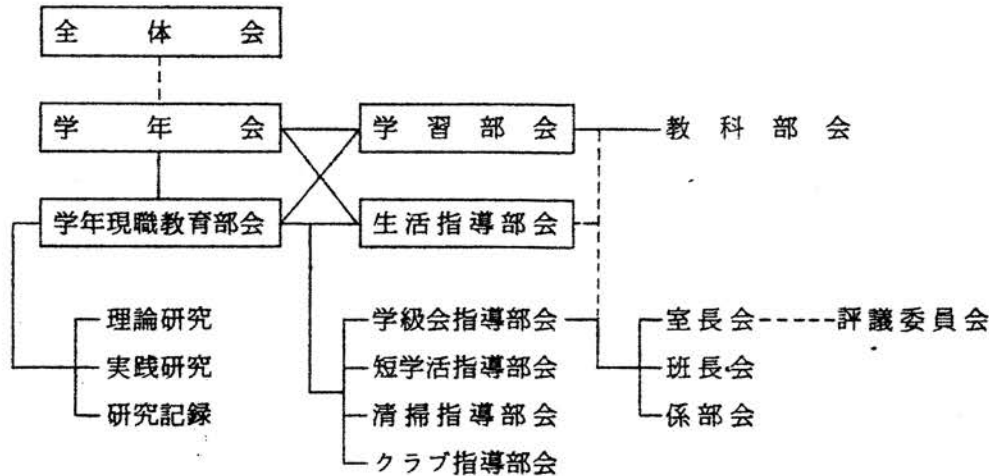
以上のことから、学年では、指導技術・バズ学習理論の修得と教師自ら実践をし、基本的な指導の共通理解をはかるために、本主題とした。

3. 研究方針

- (1) 生徒の学習状態と生活行動様式を段階的に把握し、学習と生活の基本的なルールを定着させる。
- (2) 班活動・係活動を通して学級集団を高め、学年集団づくりへと発展させる。
- (3) 学級集団から学習集団の向上の段階的な指導法を研究する。
- (4) 教師集団の共通理解を深めるために理論研究と実践をすすめる。

4. 研究方法

- (1) 学級会・短学活・清掃活動・クラブ活動の指導実践を記録し、蓄積する。
- (2) 全校・学年・教科の授業研究の実践をする。
- (3) 室長会・評議員会・班長会・係活動の打合せ会を開催する。
- (4) 「バズ学習の理論と実際」を使用し、学習会を持ち、教師集団の共通理解を深める。
- (5) 授業の課題と評価の授業研究を深め実践例の蓄積をする。
- (6) 研究の組織を明確化する。



5. 研究計画

○ 第一学年 現職教育年間指導・実践内容

月	学級会活動	短学活	授業研究	清掃活動	クラブ活動
4	仲間意識を高める	一斉による連絡確認	一斉授業開始	清掃の意義	クラブ紹介
5	班編成を考える	短学活を考える	授業の組み立て	清掃の仕方	クラブ活動へ参加
6	班日記の指導	短学活の充実とパターン化	授業の約束ごと	保健衛生と清掃	活動状況把握
7	バズ活動の育成	短学活を問い直そう	話し合いのルール	清掃道具の修理	クラブ活動の意義
8	健康体力づくりと生活のリズム			家庭の清掃	自主的に活動させる
9	班編成・生活リズムの確立	短学活のくふう	班活動を高める	清掃大作戦	クラブ活動参加状況点検
10	行事を通して学級意識の高揚	短学活の公開朝の短学活	話し合いの活発化		クラブ活動再調整
11	学級の組織づくり生徒への参加	短学活の公開帰りの短学活	課題への取り組みませ方	清掃の点検・評価の仕方	クラブ発表会への参加
12	班日を問い直し	バズ活動の反省	即時評価の方法について	清掃分担について	活動の成果と評価
1	基本事項の習慣化学習・生活の規律	短学活を問い直そう	授業の取り組みについて	清掃委員・係との協力	
2	基本事項の習慣化バズ学習の約束ごと	短学活の充実	一年のまとめ		
3	学級会活動の総括	2年生へのはし渡し	次年度への方向性	清掃大作戦	次年度への目標を作文する

6. 学習集団づくり

学習効果を上げるためには、学習をする基盤となる学習集団づくりの手だてを考える必要がある。そこで、学年として五つの集団活動の場で指導することによって仲間意識を高め、学習集団を築き、学力を高めていきたいと考えた。その五つの集団活動の場とは、(1) 学級会活動 (2) 短学活 (3) 授業 (4) 清掃活動 (5) クラブ活動 である。

(1) 学級会活動の充実

学級集団としてひとりひとりが自覚するためには、学級目標を設定することが必要である。各学級の目標例をあげると、・クラスが一体となり協力する、自分の思っていること、考えていることは、はっきり言おう ・他人の立場を理解しよう ・素直な態度で接しよう ・話し合いに参加しよう ・規律とけじめのある学級、思いやりのある学級、明るい学級 などある。これらの目標に向って、具体的な手だてを考え、人間関係を深め、学習効果を高めるように考えている。

(ア) 学力と人間関係を高めるための手だて

- 班日記を通して学級や班がかかえる問題を認識させる。
- 生徒会活動に積極的に参加させる。
- 自己の人間性・性格を全員に知ってもらう。
- 学級における生活の見つめ直しを行い、その中からなれ合いでない友人関係をみつける。
- 態度的な面で、マイナスになっている点を考えさせて学習態度をきちんとさせる。
- 環境を整えることによって落ち着いた態度を養う。
- 班にすることによって話し合いを活発にする。

(イ) 問題点

- 行事・連絡等に学級の時間が多く費やされる。
- 教師が学級の話し合いの中心になっているため、学級のリーダーの活動が不十分である。
- 班長になる人物の不足が感じられる。

(2) 短学活の充実

一日の生活・学習の出発点である朝の短学活(20分間)と一日の生活・学習の整理と家庭学習への接点としての帰りの短学活(25分間)を定着させることによって人間関係を深め学習効果を高められると考えている。

したがって、短学活で基本的な生活習慣の指導徹底をはかる必要がある。そのために、「生活実践記録」を作成し、学級・班目標、生活の反省、係の連絡、宿題、家庭学習の計画等を記録し、毎日の生活のリズムを確立させる。又、短学活ノートを作成し、授業の復習を班で取り組み、基本的な学習習慣を身につけさせる。さらに、短学活を充実させるために活動内容を明確にさせるようにしている。その一つには、学習活動目標を決めて取り組む。例えば、一英語の単語を10回書こう・漢字を10字書こう・計算問題を10題解こう等の目標を決め、班で競争したりして学習内容を定着させる。もう一つには、生活習慣の定着をはかるために一日の生活・学習の反省と評価、点検活動を班や学級で実施する。

(ア) 学力と人間関係を高めるための手だて

- 班で忘れものを点検し、お互いに注意し合う。
- 生活の反省や班日記に書かれている事について話し合う。
- ドリル学習の計画を立て学級で取り組む。
- 係の連絡がしっかりできるように、そして聞けるようにメモをとる。
- 生活実践記録の記入をきちんとさせる。
- 短学活の内容をパターン化する。

(実践例)

<p>(朝)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 8:20 ドリル学習 • 8:30 解答・疑問解決 • 8:35 生活目標確認 健康観察 忘れ物点検 • 8:40 連絡 • 8:45 第1時限開始 	<p>(帰)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 3:10 一日の生活の反省 • 3:20 ドリル学習 • 3:30 生活実践記録記入 連絡 • 3:35 クラブ活動・下校
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(イ) 問題点

- ムダ話をして時間を費やす生徒が多い。
- 班長会による話し合いが活発でない。
- 基本的なバズのルールが守られていない。
- 班長指導がまだ十分されていない。
- 授業の疑問解決が不十分である。

(3) 授業の充実

先ず、学習をすすめるにあたって、ひとりひとりに基本的な学習習慣を身につけさせ

ることが必要である。そのためには、(1) チャイムで活動開始 (2) 教具・教材・宿題を忘れない (3) 無駄話をしない などの基本的な学習のルールを設定し、習慣化させる。一方、教師側の姿勢として、教材研究は勿論、授業における課題と評価についての方法を研究し、実践できるようにつとめる。又、教師もチャイムと同時に活動し、授業の始めと終了のけじめをつける。

(7) 学力と人間関係を高めるための手だて

- 始業・終業のあいさつを室長(日直)の指示でする。
- 欠席者の授業の記録を班でとる。
- 机上の整理をし、ノート記入は鉛筆でする。
- 忘れもの調べを教科担任でも行うようにする。
- 授業での板書事項をノートに筆記する時間を確保する。
- 授業の課題の指示を具体的にする。
- 毎時間の評価をする。
- チャイムで活動できるように教科で準備課題を出す。

(1) 問題点

- 班での話し合いが十分できていない。
- 授業と家庭学習の連結がまだうまくできていない。
- 学習の定着に差が目立ちはじめた。
- 学習で班員のなれ合いが出はじめている。

(4) 清掃活動の充実

学級の環境を整備するとともに、仲間の協力性を高めるために清掃活動を通して集団づくりをする。清掃活動の目標は、
・時間内にきれいにする
・進んでそうじをしよう
・分担区域に早くつこうなどである。特に教室環境を整えることによって、落ちついた学習の雰囲気をつくり、学習効果を高めるようにつとめることが大切である。

(7) 人間関係を高めるための手だて

- 全員が参加し、協力してやれているか常に問いかける。
- 清掃委員・班長を中心にまとまってやれたか点検する。
- 帰りの短学活で反省をする。一点検ノートで

(1) 問題点

- 何もしない生徒をどうするか。
- 制服のままでは清掃がしにくい。
- 清掃の仕方がまずい。
- 班を評価するために、班ごとに清掃区域を割りあてたが必ずしもよいとはいえ

ない。

(5) クラブ活動への積極的な参加

学校生活の中で子どもたちが、自主的に活動できる場の一つであるクラブ活動を十分人間関係や学習に生かしたいと思っている。学年の目標として、クラブ活動と学習の両立を目ざし、3年間続けられるように指導している。

(ア) 人間関係を高めるための手だて

- クラブ活動の参加状況を出欠表を用いて、体育係で記入し、担任がその様子を把握する。
- 横のつながりと縦のつながりを密接にし、仲間を広げるようにする。

(イ) 問題点

- クラブ活動に参加するものと、しないものがはっきりわかれてきている。
- 特に、運動クラブの活動内容に身体的についていけないものがでてきている。
- 先輩・後輩の人間関係で、私的な交友関係が見うけられる。

7. まとめと今後の方向

本校では、3学年とも一学期はバズ学習体制づくりに主眼を置いて取り組んできた。その中で、一年生においては、上述したように、五つの集団活動の場を通して学習集団の確立につとめてきたが、生活集団としての仲間意識は高まりつつあり、バズ学習の形態もある程度でき上がってきている。しかし、まだ学習効果を上げるための学習集団としてはできていない。

今後、さらに学習集団を高めるために、集団としての班のあり方や班長指導、また学習のルールを習慣化する方法を研究していきたい。特に、教師側においては、授業の課題と評価のあり方を研究し、実践につとめていきたい。

第15回全国バズ学習研究集会

学力を高めながら、同時に人間関係を深める態度の育成

兵庫県姫路市立白鷺中学校 福島達郎

1. はじめに

明治以来の日本の学校教育は、学習の個別化や能力即応の試みなどはあったが、一貫してその底流をなしてきたのは一斉授業の形態であり、今後もそれは続いていくと思われる。しかし、それは協同より競争の原理に基づくものであり、そこには望ましい人間関係の深まりは期待し得なかったし、「落ちこぼれ」の問題があとを断たなかった。

更にそれに拍車をかけたのは昭和30年代からの高校入試の過熱で、落ちこぼれが「非行」を生み、生徒指導上、大きな問題を投げた。そのような欠点を補うべく、兵庫方式が導入されたが、それとても充分な方途とはなり得なかったため、私たちは次のような試みを行ってきた。

2. 学力と人間関係の統合

(1) 統合(止揚)の教育

いがみ合いつつも人間は集団の中でしか生きられない。よく生きようとするれば、集団の中で個を主張し、他を排除しようとする。個の主張がすすめば、孤独となり、相手を求めようとする。人間は矛盾と対立に満ちた非合理的な存在である。そのような人間の心を爆発させないで、教育の究極の目的であるあるべき姿の人間形成をはかるとすれば、個と個、個と集団の矛盾や対立、相求を突

さどめ、相互の否定や関連をもとに価値葛藤を行ない、一段と高い段階で統合する教育が必要である。

(2) 対話(バズ)を中核にすえた学校生活

学力と人間関係の同時達成をめざす統合・止揚の教育を具現するため、学校生活のあらゆる場に「話し合い(対話)(バズ)」を中核にすえ、それぞれが有機的に関連しながら学校生活が展開されるよう配慮する。

(話し合いの場、技能習熟の場の設定については、別項参照)

3. 学力と人間関係の同時達成をめざして、

(1) 授業(教科の時間)の改善

イ、教師ひとりひとりが、日々の歩みのめやすを持つ。

- こんな姿に (めやす理想像)
- よりたしかなあゆみを (本年度の教科の努力目標)
- こんな手だてで (授業改善の方法)

ロ、指導案を改善をはかるとともに、基礎・基本をおさえた授業の組み立てをはかる。

ハ、授業のパターンの設定 --- 三段階四分節

準備過程、中心過程、確認過程のそれぞれにおいて、原則として、課題提示 — 個人思考 — 集団思考(バズ) — 全体思考(全体バズ) — 教師のまとめ(補足、修正)を組む。そして集団思考・全体思考の場で、学力と人間関係の統合をはかる。

(2) 教科外時間における試み

イ、セブンタイム

土曜日を除き、毎夕校時に45分間設設。

セブンタイム → 学年集会 → 代議員会 → セブンタイムのサイクル化に留意している。

(生活バス)

- ・相互作用による生活の確立と、人間関係の改善をめざす。
- ・朝バス(学活)で設定した生活目標・点検項目、清掃バス
…などのチェックをし、明日の生活の方向づけをする。

(復習バス)

- ・人間関係を基盤にし、基礎学力の定着をめざす。
- ・1日の学習の要点のまとめ、疑問点の解決、家庭学習の課題の確認と解決法、明日の学習に対する準備、予習などについて話し合う。

ロ、部活動

部活動は、上級生、下級生が学年の枠を越えて共通の目的に向かって努力し、全校的視野に立った縦の人間関係の確立が一つの目標となる。そのため、規則、規律、礼儀作法、協力や団結、忍耐、はげまし合いなど人間関係のルールが重視される。

また、部活動の中に、バス及びVTRなどの機器をとり入れ、効率を高めつつ人間関係の深化をはかっている。

- ・部活動部長会 …… 予算についての話し合い、各部の理解と協力。
- ・部活動保護者会 …… 学習と部活動の両立、その他問題点の解決。

ハ、学年集会

毎土曜日35分間、セブンタイムでの問題点、その他学校生活上の問題点などを話し合いながら、学年レベルでの人間関係を深める。

ニ、止場の時間(ゆとりと充実の時間)

- ・毎水曜日、午後の2時間、学年を前後期に分けて実施しているが、自主的、創造的学習をすすめる、個性、能力に応じ学習の個別化をはかり、相互作用を繰り返しながら、学力と人間関係を止場することをその目標としている。

- ・学年、学級の枠をはずし、(無学年制)教科学習の延長としての22コース(1コース20名前後)を設定し、全校生を対象として全職員が援助にあたっている。
- ・各自に半年間の研究課題を設定させ、コースを選定させる。
- ・時間ごとに自己評価をさせ、最後に研究発表会を設定する。

(3) 学校行事における試み

1. 集団宿泊訓練

寝食を共にした2泊3日の訓練で、自己と友人を見つめさせ、学習集団としての学級のあり方を追求させる。また、授業をはじめ学校生活のあらゆる場に必要な話し合い(バズ)の技術を習得させる。

2. 親子の対話集会

- ・学年ごとに全生徒と父兄が参加し、共通の問題について、またその問題から派生する諸問題について、パネル形式で、バズを入れながら大集団で話し合う。
- ・親子の(世代の)断絶が問題になる今日、親が子を、子が親を理解し、家庭における望ましい人間関係の形成に有効であると考えている。

4. おすび

授業時間、教科外の時間、学校行事の3領域について、学力を高めながら人間関係を深めることを目標に、白鷺中学校が、今行なっているつたない試みをのべてきたが、これらは遊離していたのではその目的は達せられない。すべてが有機的に関連し合い、サイクル化し、学校全体の教育活動の中で実践されてこそ、はじめて、その目的が達せられると考えている。

非行生をうまな
い生徒指導

統合
止揚

学級の間関係
自己実現
学級のモラル

わかる授業・全員参加の授業
の創造

- 1、課題提示
- 2、個人思考
- 3、班討議
- 4、班でのまとめ
発表
- 5、全体討議
- 6、教師によるKR

到達度評価

セブントタイム

復習バス

生活バス

- 1、生活の反省
- 2問題提起 (教師の援助)
- 3、班での話し合い
(全員参加)
- 4、班でのまとめ発表
- 5、全体討議
- 6、学級の意志決定

- 7、点検活動 (違反者は
集団に対する責任とし
て自分の立場を表明す
る 集団の約束)
班討議
全体討議
- 8、点検活動をふまえて
集団決定

学年集会

集団宿泊訓練
集団の規律、話し合いの訓練

止揚の時間

- 1、課題の提示
- 2、自主研究
 - ・計画立案
 - ・資料準備
 - ・研究
 - ・自己評価

グループ

研究発表

部活動

協調
協力

個人の学習と集団の人間関係
できる者とできない者
相互作用による学習意欲の喚起
自己評価の場

対話

個人と個人との矛盾・対立
個人と集団（学級）との矛盾
対立
理想と現実の矛盾
学級のモラルと人間関係

教師の研修

- 1、話し合いを深めるための研修
話し合い活動調査
援助のしかたの研究
話し合い方についての生徒相互研究
- 2、教科における基礎基本の研究
- 3、到達度評価の研究
- 4、課題とその提示のしかたの研究
- 5、学習技法の研究
- 6、資料の準備

活動

友

第15回 全国バス学習研究集会

生きる力をつけるための

生徒指導

広島県立豊高等学校

鎗野 由起江

〈研究主題〉

我校では5~6名の教員でグループを3つ編成し、週番制で校内巡視という活動を行っています。

これは、学校の内を全員でみていこうという主旨から生まれ、当番にあたる週は特に中心になっていこうということだったわけですが、それがあつた教員にかたよつたり、朝の遅刻者の指導と昼の外出者の指導だけにおわつてしまいがちで、生徒はもちろんのこと、教員までが単なる監視役のような気持ちになり、形式だけの校内巡視になっているのが現状です。

そして、こうした私たちの補導的なたとくみの姿勢は、生徒に生きるための自主・自律の方向を見失わせ、問題や監視から逃げまわる行動をとらせてきたのではないかと考えます。

私たちはもう一度原点にかえつて、生徒指導とは一体何なのか、つきつめてみる必要があると考えます。

< 研究内容 >

1. 補導

2. 問題行動の背景

- a) 学業不振
- b) 欲求不満
- c) 生活習慣の乱れ

3. 生きることを学ばせる

- a) 教育の目的
- b) 生徒指導とは

4. 教育活動として位置づける

- a) 教科活動の中で
- b) 教科外活動の中で
- c) ある生徒とのかかわりの中で

< 問題提起 >

学習指導と生徒指導を切り離して考えてきた教育活動は、二セモノ
だったのではないか。生徒指導とは、補導の前にまず人間としての生
き方を教えることではないか。

学習の中で生活そのものを学ばせなくてはならない。生活の中で学
ぶという姿勢を教えずにはいけない。

バズ学習のいう認知目標と態度目標の同時達成とは、このことに
他ならないのではないかと考えます。

第15回全国バズ学習研究集会

集団の高まりに働きあう生徒の育成

＝バズと分団新聞づくりを通して＝

滋賀県近江八幡市立西中学校

1. 西中教育（本校の実践）の概要

本校で、全校的に「バズと分団新聞づくり」の実践に取り組んで、早や2年を経過しようとしている。「集団の高まりに働きあう生徒の育成」をめざし、学力と人間関係の統合、教科指導と生活指導の統合という大きな目標に向かって、ある面では効果的に、また反面では多くの問題点、困難点の解明に努力しながら、その実践につとめてきた。そんな中で試行錯誤しながら除々にではあるが、バズ活動の拡大とその実践を進め、本年度に入り、ようやく本校教育活動の中でのバズの位置づけをより明確にし確認した。それと並んでより高い効果を求めて、西中教育の視点ともいべき骨組みの確立と教師側の共通理解のもとに、さらに「バズと分団新聞づくり」の実践をすすめていきたいと考えている。

本校の教育的課題として

- 人間関係を、個と個、個と集団のかかわりの中で高めさせる。
(よい個人はよい集団から、よい集団はよい個人からつくられる、この相互関係のきびしさの中で集団の質を高める。)
- 対話を重んじたバズ学習をとり入れ、情報のとり入れ方、情報の分析判断ができるよう学習させ、基礎能力、技能を高める思考力をつける。
- 相互保障のかかわりの中で、特に失敗を切り抜ける経験をつませる。
- 承認のある集団の中で、自己の能力に応じた成就感を経験させ、自信を回復させ、自己実現力を高めさせる。
- 適接な教育的配慮を施し、生活のリズムをはかり、日常生活習慣を確立させる。
(具体的には、学校行事の指導、清掃の指導、学習の進め方の指導、給食指導、また、特に授業にはっきりとしたリズムを持つことを通して。)
- 心理的抑圧をとりのぞき、意欲を躍動させ、学習に対して前向きにさせる。

また、教育課題への取り組みとしては

学校経営を営む上で、一番大切なことは、何んとしても教師の共通理解であろうし、誰もこれに対して否定する人はいないと思う。だがしかし、その共通理解をはかるためには、はっきりとした学校教育路線というか、経営の土俵が確立していないと、共通理解は字面だけで、個々の教師に侵透しない。従って教育効果はあがらない。

本校の教育路線は、教職員、生徒誰でも、どこでも 計画 —— 実践 —— 反省の過程を通して

きびしさ ————— よい個人はよい集団から、よい集団はよい個人からつくられる
＝ 友情のきびしさ＝

認めあい ————— 相互保障のかかわりの中で、特に失敗を切り抜ける経
支えあう 験をつませる。

感 動 ————— 承認のある集団の中で、自己の能力に応じた成就感を
経験させ、自信を回復させ、自己実現力を高める。

この三昧を十分あじあわす。このことによって豊かな人間性が確立すると信じ、実践をすすめている。

(1) 学級づくり

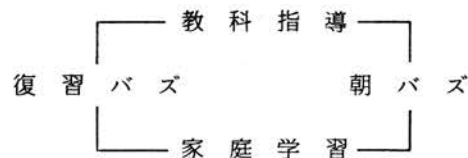
この三昧を、いつでも、どこでもと願いたい。そうなるためには、訓練の場と時が計画として必要となる。

その場は学級、時としては、分団新聞づくりの時間、復習バス（生活バス）の時間を設定してこれにあてている。この時間を「西中タイム」と呼び、これを学級づくりの柱とし個々の意見が取り上げられ、個が認められる質の高い学級集団づくりを目指している。

個 ————— 分 団 ————— 学 級

(2) 教科指導

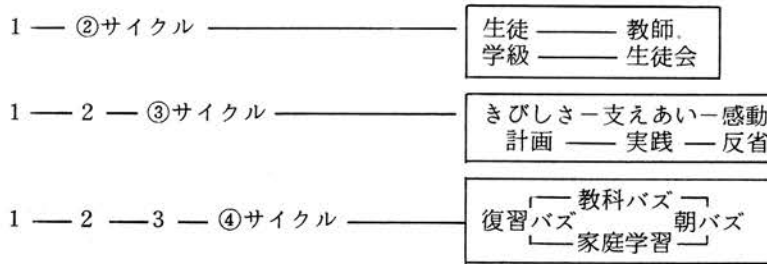
さらに、このバス学習方式を教科指導に取り入れ、参加と学習という2つの変数を同時に満足するような指導法を組み立てることをねらいとすると同時に、学習は連続である。その関連を重要視している。



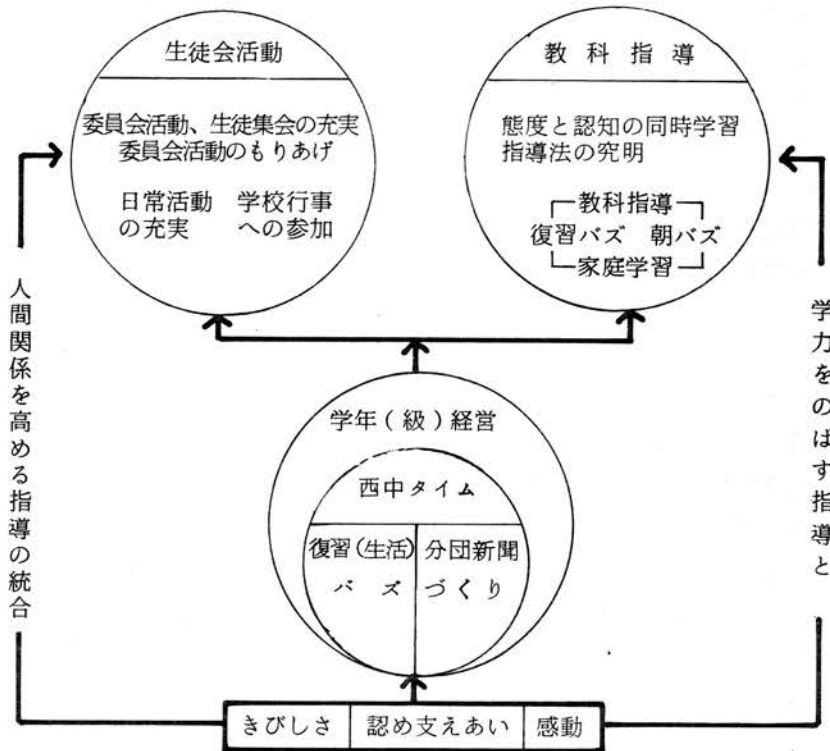
(3) 生徒会活動

生徒会委員と学級組織を有機的に結びつけ、委員会活動を旺盛にすることによって、日常活動を充実させます。また、学校行事はすべて自分たちの手で、計画から反省、反省から計画へと委員会活動をもりあげている。

(4) 本校教育実践の3タイプ



(5) 西中教育構造図



2. 分団新聞づくり

「みんなでつくろう、分団新聞」を合言葉に、学級の各分団が新聞づくりにはげんでいる。

これは本校独自の取り組みで、復習バスを主とした活動のもとに、さらに個人の努力と分団、学級の協力体制をより充実し、効果あるものにするための実践であり、また本校でいう3つの味、即ち「きびしさ」、「認め支えあい」、「感動」の場面を最も作り出しやすい活動でもありと考えている。個の意見や考えを卒直に分団内や学級全体に伝えるためには、

話しあい活動とともに、まずそのことを文字に表わした方が確実であり、より訴える力を持ち、よりたやすいことであるということが新聞づくりの理由でもあった。換言すれば、バズ活動の効果を、新聞づくりを通してさらに高めるための、トレーニングの場でもあると云った方が適確かも知れない。

この分団新聞は、原則として、編集会議 — 記事内容 — 割付 — 校正 — 発行までを45分としている。ほとんどの場合テーマ設定をするが、時には全く自由に個人個人が、いろいろな面から自分の考えや意見を記事にすることもある。とにかく、この活動の中では、メンバー自身の怠け、甘えなど絶対許されず、また互いを認めあい、支えあい、全エネルギーを注ぎ込むことによってはじめて発行が可能となるその過程に大きな意義(きびしさ、支えあい)がある。さらに発行できたときのよろこびと満足感(感動)と、その記事内容が、その後の分団や学級のメンバーの話しあい活動の素材となるところに、大きな効果を伺うことができる。この新聞は、各学級ごとに随時発行されているが、月1回「全校分団新聞コンクール」があり、全校統一テーマのもとに、全生徒が「新聞発行」という共通の目的に向かって精一杯努力し、援助しあい、誰ひとりとしてとり残されている者がいない各分団の暖かい動きを、その場に見ることができる。きびしさ、支えあいのもとに1つのものを創りあげるよろこび、すなわち1枚のまっ白い紙が45分のちには、いろいろと工夫をこらした文字で一杯埋まった、完成された価値ある紙面となる瞬間のその感動を自らが味わうことになる。今後ともより多くの発行を重ね、さらにバズ活動を高め、その効果をあげるためのトレーニングの場として、そして新鮮でより高い感動を求めて……。

3. 生活バズ

当学区は、琵琶湖東岸の近江八幡市の西部に位置し、半農半商であるが、近年特に兼業農家が増加し、一部の新興住宅地とともに、職業構成に大きな変化をきたしている。しかし、1小1中学校の1学区から成り、環境の上からも大きな問題行動は見当たらない。ただ、ほとんどの生徒が無気力であり、よい意味での競争心や意欲に欠け、人権意識も低い状況にあった。そんな中で、S53年度、3年生でバズと分団新聞づくりを試行し、ある面での成果の上になつて、S54年度から全校的に取り組み今日に到っている。多方面にわたるバズ活動の中で、「生活バズ」はまだ1年足らずの実践であるが、ここではその一端にふれておこう。

従来、中学校教育は、えてして教科指導に重点がおかれ、生活指導は教師が管理し、統制するものと一部に考えられてきたが、この考えのもとではもはや学校経営は成立しない。人間とは……。しからば「教育とは何か」を問いなおし、その教育の具体的方法を探究しなくてはならない。

生徒は、学校生活のほとんどの時間を学級で過している。学級は学習や生活のすべての基盤である。この学級を形成している1人ひとりの生徒が、互いに認めあい、心と心が結ばれていれば、どんなときにも助けあい、困難な問題に対してもよりよい解決の方法を見出していく。すなわち個と個、個と集団が相互に作用しながら高まっていったならば、従来のように問題行動をおこした生徒に対する教師の一方的な注意、指導は単なる一時的なその場限り

で、時間が経過することにより同じことの繰り返しとはならない。

本校では、下記の生活点検表のもとに、朝バズと復習バズの時間に、生活反省を兼ねた生活点検活動をすすめている。各項目に従い、自己反省と相互反省とを○、×式でチェックし、大きな問題点については、復習バズの30分間が生活面の話しあい活動に終始してしまう分団を見うけることもある。これらのチェックをもとに1週間の集計をし、個や分団の問題、学級全員にかかわる問題等について、週1時間の生活反省の時間を設定している。時にはひとりのメンバーの言動が学級でとりあげられ、活発な討議の場が見受けられるようにもなってきた。この「生活バズ」の実践を通して、従来絶えることのなかった遅刻生が完全になくなり、清掃時は全員が協力しあっている。その他、校則面でも、生徒相互の話しあいと確認の結果守られるようになってきた等々、日常の学校生活の中での成果としてとらえている。

教師の一方的な生徒に対する抑圧の力より、はるかに効果的なことは明らかである。ただし、○、×の基準、点検項目、特に×印の多い生徒への事後指導等問題点もないわけではない。この2学期からは、これらの一部を教師バズで改善し、新しい実践をすすめている。そして、その指導と実践の中で、教師側の共通理解として確認しあったことは、人間は(生徒は)誰も良心を持つとともに、その時その場において、それと反対の心を持つことがある。

教師は、そんな時こそ第三者的にどちらが正しいかと問いかけることにより、生徒自身で判断できる能力を養う指導こそ大切である……。と。

生活点検		第 分団		月 日(曜日)		記録者名		検 印						
朝・帰りバズ		朝 の 点 検				帰 り の 点 検				合 計	点検項目について○×で記入の可(△も可)こと			
点検項目	健康状態	遅刻	服名 装札 その他	不 用 物	バズへの参加態度	あ い さ つ	休 憩 時 の 過 し 方	授 業 中 の 態 度	清 掃 態 度			忘 れ 物 物 品	学 習	
生徒名														
今週の目標	学習内容の疑問点	1					4							
		2					5							
		3					6							

新教育過程・障害児教育の部

第5回 全国バス学習研究集会

豊かな心情を育て自己実現をめざす教育活動

— 個を生かす集団を求めて —

兵庫県姫路市立城陽小学校

安 積 悦 朗

1. はじめに

一人ひとりの子どもが生き生きと自主的・主体的として活動する学校づくりをめざして実践してきたが、次の児童の実態にみられるようにまだまだ十分な成果が期待できない。

- ◎学習活動、特別活動等の場で創意工夫する様子があまりみられない。
- ◎自己中心的な面が多く、集団の一員として協調していく態度が不足している。
- ◎教育諸活動の場において自主性が乏しく、ねばり強さにも欠けている。

このような実態は、次の事項に起因するものと思われる。

- ・教師中心の一方的なコミュニケーションが支配的であること。
- ・子ども相互間にはコミュニケーションの通路が不十分であること。

以上の反省に立ち、本年度は「自発的な子どもたちの共同化をどう進めていくか」すなわち、個を生かすための集団のあり方をどう志向すればよいかをめざして実践にとりこんでいる。

2. 研究のめあて

児童の実態をふまえ、本年度は次の努力目標を設定した。

- ◎進んで学習にとりくみ、お互いに考えを出し合い活動できる場づくり。
- ◎自分の生活をよくみつめ、友だちと共に高まり合う集団づくり。
- ◎自分の体を知り、進んで体力を向上させる動きづくり。

以上の努力目標を達成するために

- ・小集団活動を活発にすることによって一人ひとりを高めていく。
 - ・ひとつひとつの小集団を高めることによって全体を高めていく。
 - ・小集団を単位として、話し合い及び作業の活発化をめざしていく。
- 以上の三点を設定し実践にとりこんでいる。

3. 活動内容

(1) 朝の会 (学習バス・生活バス) のとりくみ

小集団で協力し、子ども同士の精神的連帯感を強め築いていく場として、週4回 (火～金各20分) を設定している。

ア. 学習バス (復習バス) 前半10分

◎国語・算数科の基本的事項「読み、書き、計算」についての復習を中心に実施。

◎小集団で与えられた課題や子どもたちが自主的に考えた課題を協力しながら解決していく。

◎基本的な姿勢として、必ず自分の考え (わかること、わからないこと、考えるすじ道) をはっきり持ち、小集団の全員が発言し合うことを原則にとりくませている。

イ. 生活バス 後半10分

◎「自分の生活をよくみつめる」ことを中心にしながら友だちのくらしを理解し、共に支え合って高まっていこうとする態度を養う。

◎生活の中から体験を出し合う、生活習慣調査等の結果をもとに話し合う。また、今日一日の約束と前日の反省等について友だちの発言、提案を大切にしていこうようにしている。

(2) 児童集会活動のとりくみ

毎週土曜日の20分間を委員会活動の中の集会委員会を中心にし、子どもたちの自主的な活動の場を設け、情操面のとう治ならびに自分たちのくらしをみつめ高めるよう児童自らの手で企画運営させている。

ア. 音楽集会

全校児童が心をひとつにし、のびのびと歌い楽しむ活動を通して児童相互のコミュニケーションをはかっていくことをねらいとしている。

子どもの司会、指揮によって放送委員会の協力、音楽クラブの伴奏で大合唱したり、それぞれの学年に応じた楽器を持ち寄っての大合奏、学級毎の発表会等、子どもたちが楽しみにしている集会である。

イ. 生活集会

自分たちのくらしをみつめよくしていくため、それぞれの課題に応じて全校集会、学年集会、学級集会と形を変え、話し合い活動を中心に運営している。

子どもによる司会、小集団を中核にした話し合いは活発に進んでいる。

(3) 学校児童会による行事のとりくみ

集団の一員としての立場、責任を自覚し、一つの目標に向かって協力してこうとする心情態度の育成をめざしている。

委員会活動の中の企画、広報委員会を中核に学校児童会の話し合いを通して検討、各委員会の責任分担、各学年学級の参加についての話し合い活動、その実現をめざしての真剣な行動は、これまでにみられなかった児童の変容である。昨年度実施し、本年度も続いて計画したり実施した行事は次のようなものである。

7月 水泳大会 9月 夏季作品展覧会 / 2月 全校リレー大会

2月 ドッチボール大会 3月 お別れ会

(4) 労作の時間のとりくみ

自分たちの学校環境を美しくし、緑の木を育て、四季の美しい花を咲かせる等の体験学習を通して、明るさ、やさしさ、落ち着きを育てることをねらいとしている。

ア. 学校づくり

毎週水、木曜日第6校時を「労作の時間」とし、4・5・6年が主体となって学校園、学級園、栽培園づくり、池づくり等汗を流してとりくんでいる。

この作業を通して少しずつ形ができていく喜び、また完成後の植物栽培の熟の入れ方等は、子ども主体ならではの感を深くしている。

イ. 4・5・6年による体験学習

毎週金曜日の第6校時を活用し、各学年の年間計画により、小集団を単位とした活動を中心にし、それぞれユニークな体験学習の場を計画実践している。

例 6年 ・ 体力テスト会 ・ 一人一はち栽培 ・ 農園栽培 ・ 市川の野鳥観察
・ 楽しい工作づくり ・ 卒業記念品づくり

4. おわりに

一人ひとりの子どもたちの豊かな心情の育成と自己実現をめざすための小集団を中核にし、その話し合いと作業を活発にさせることによって集団を高める努力をしてきた。その過程で今後解決していかなければならない問題が山積している現状である。

○小集団を指導するとき、指導過程のどこにどう位置づけていくかの見極め、また、話し合いの内容面ばかり重視することなく、小集団づくりを児童の実態に応じてどう指導していくかを究明していかなければならない。

○小集団による話し合いや活動は児童の意欲を高めるが、コミュニケーション技能の練習不足、リーダー養成が不十分のため、低位な助け合いに終わることが多い。

○無計画な小集団の活用は、集団の高まりが少なく効果も少ないため、一斉指導で教師が教えるという方向へ流れやすい傾向もみられる。

以上

第15回 全国バズ学習研究集会

「ゆとりと充実をめざす指導」

— ゆとりの時間の定着 —

姫路市立網干西小学校

山田正智

研究主題とその趣旨

昭和55年度からの教育課程改善のねらいの3つの柱の1つに「ゆとりのある、しかも充実した学校生活を送れるようにすること」がとりあげられている。

本校では、子ども達が毎日、生き生きとした学校生活を送れるよう、「ゆとりの時間」のよりよいあり方をさぐりつつ、次の3点について計画し、実践している。

〈実践内容〉

1. 児童会活動の充実

- ・常時活動(委員会)を活発にする。
- ・代表委員会、町別児童会を子どもたちの手で年間計画をたて、実施する。
- ・それらの活動をVTRに収録し、昼食時に各クラスのTVに放映。

2. ふれあいの時間の設定

- ・奉仕活動……/人/鉢運動　勤労体験学習の日(第3月曜日)
- ・学習相談
- ・校外体験……理科・社会科における観察・見学指導

3. 業間運動の継続・発展

- ・月/回は業間を3時限目まで延長し、行事(大会)として利用。
- ・「やらされている」という意識から、「楽しい」「やってみよう」「できた」と思われる活動へ

ゆとりの時間の定着

週の時間割

業間体育 →

曜日 時	月	火	水	木	金	土
1	○	○	○	○	○	○
2	~~~~~					
5	○	○	○	○	クラブ活動	
6	勤労日	委員会		ふれあい	行事(文集)	

体力を高める業間体育

1. 基本的な立場

- 成長過程にある子どもたちは、旺盛なる身体活動の欲求を持っている。しかし、休み時間に広い運動場へ出て力いっぱい運動することを忘れ、家庭へ帰ればほとんどの子どもたちが塾通いをしている。活動したくても手足をもぎとられたも同然の子どもたちである。そこで、本校ではその欲求を十分充たすために計画的に活動の場を設定し、仲間意識を育てた。また積極的に自分がかめあてをもって運動し、めあてに1歩でも2歩でも近づきたいという喜びをバネにして、自ら体力の向上が図れる業間体育に盛り上げたいと考えている。

2. 本校での業間体育のねらい

- (1) 子どもたちの活動欲求を充たしながら、体力の向上をはかる。
- (2) 身体的疲労や精神的疲労を回復させ、気分の転換をはかる。
- (3) 全校生が同時に運動場を使用する方法やマナー、きまりなどをわからせ、全校生が共に運動したり、ゲームをしたりする楽しさや集団意識を育てる。
- (4) 毎日一定時間に体を動かしたり、跳んだりすることが生活の一部だと思えるようにする。

3. 業間体育を行う上での配慮

- (1) どの子どもも、思いきって運動できるようにする。
- (2) 楽しくできて、長続きできる種目にする。
- (3) 低・中・高学年のそれぞれが一時に同じ場所で運動することによって連帯感が培われ、仲間意識がもてるようにする。
- (4) 3校時にくいこまないようにする。

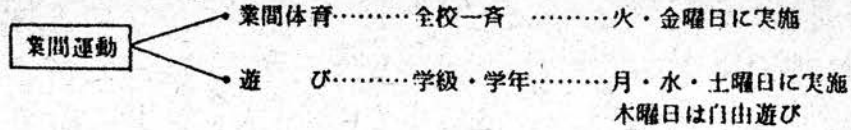
4. 昨年までの歩み

- 開校以来月別年間計画をたて、週2回(火・金)計画にしたがって実施してきた。内容としては全校行進・フォークダンス・体操・ゲーム・なわとび(なわとび体操・級別検定) 駈足・アスレチック等にとり組み、子どもたちの基礎体力の向上に励んできた。

例えば、なわとびでは各自になわとび進級表(低・高)をもたせ、各級にどれだけ挑戦できるか。また、どのぐらい長く跳ぶことができるか等、子どもたちが進んで自己のめあてに力いっぱいとりくめるよう努力してきた。さらに各学級に長なわを備え、みんなでなわとびをすることにより、連帯感を培い仲間づくりにとり組んできた。また3学期には耐寒駈足を早朝20分間実施し、そのまとめとして2月末にはマラソン大会を行い低学年1.5Km、中学年2.5Km、高学年3.5Kmのコースを校区内にとり、PTAの協力を得て行ってきた。

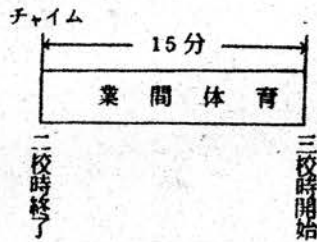
5. 本年度のとりくみ

全校児童が一齐に2校時と3校時の間25分間を業間体育の時間にあてている。



(1) 時程表の中での位置づけ

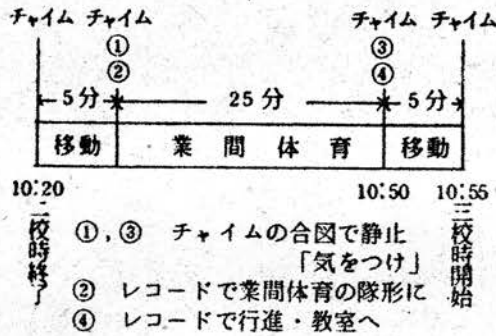
図1



- 53年度までは、図1のような15分間の業間体育を実施してきた。しかし、15分間だけでは用便・集合に時間をとられ実質的な活動時間がとれず、大変あわただしく、運動の楽しさを味わうまでゆとりがなかった。

そこで、改善策として以前より20分間時間を延長し、図2のような時程表により実施している。

図2



その結果として

- 準備や後始末の時間がとれるようになった。
- 運動量がふえ、活発な動きがみられるようになった。
- 運動内容が豊富になり、子どもたちの興味が増してきた。

(2) 心身のけじめをつける静止(チャイム)

- 2校時終了後移動しはじめて5分後チャイムがなる。移動している子も、自由に運動している子も全員その場に静止し、業間体育への心の準備をしている時間である。
なり終ると同時に、レコードに合わせサーとせなかをのぼし、姿勢正しく行進し学級の隊形へ時には学年の隊形へと行進することになっている。

(3) 年間計画

月	指導種目	体育的行事
4	・集団行動を中心に行進の練習	スポーツテスト
5	〃	歓迎遠足
6	・体操 <small>ラジオ体操第1・第2</small> ・体操 <small>なわとび体操</small>	運動会
7	・ボール運動	

・ リレー大会

- 方法……各学級男女を身長順に各々半分に分け紅白の組をつくる。
各チーム4名によるリレーとする。
1人トラック半周(80m)
- 運営……行事部で細案
(コース順・応援場所
ルール等)

月	指導種目	体育的行事
9	フォークダンスを中心に行進の練習	水泳記録会 全校リレー大会
10	"	体力テスト リレー大会
11	"	リレー大会
12	なわとび	球技大会 リレー大会
1	" 耐寒かけ走	なわとび検定
2	"	マラソン大会
3	"	鍛練遠足

業間の時間 35 分間をフルに活用する。

得点制

(学級男女別)

全校紅白別)



仲間と共に楽しむ遊び

1. 業間遊びの位置づけと内容

- (1) 本校では、月、水、土の2校時と3校時の間の25分を業間遊びの時間として位置づけ、他に朝の遊び、昼の遊び時間は自由遊びとして時間を長くとっている。本来なら、子どもは遊び好きであるはずだが、本校の実態を見ると遊び方、遊びのルールを知らない児童が多い。そこで、自由な遊びを取りもどすために計画的に遊ばせている。
- (2) 業間遊びでは運動場をアスレチック、フィールド、ランニングと分け、各学年ごとに割当表によって教師も共に遊ぶようにしている。

時 程 表

職	朝	8:25~ 8:30
	ラジオ体操・遊び	8:35~ 8:50
第 1 校時		8:55~ 9:35
第 2 校時		9:40~10:20
業	間	10:25~10:50
第 3 校時		10:55~11:35
第 4 校時		11:40~12:20
給	食	12:20~13:05
清	掃	13:10~13:25
遊	び	13:35~14:05
第 5 校時		14:10~14:50
第 6 校時		15:00~15:40
終	会	15:40~15:50

曜日	1.3週	水	土	2.4週	水	土	内 容
フィールド	1.2年	6.1年	5.6年	4.5年	3.4年	2.3年	なわとび、竹馬、ボールなどで遊ぶ。
ランニング	3	2	1	6	5	4	トラックを走る。
アスレチック	4.5.6	3.4.5	2.3.4	1.2.3	6.1.2	5.6.1	体育器具や遊具を使って運動する。

アスレチックについてはA、B、Cと場所を3つに分けて、学年にあてる。各自がのびのび西の子カードを持ち、ランニングではトラック1周することに1つ、アスレチックでは各項目1回ごとに1つ色をぬり、自主的にかたよりなく運動できるように意欲づけをしている。

<問題提起>

- ・時程の上からみて、子どもたちにゆとりをもたせる学校生活になっているだろうか。
- ・ふれあいの時間での体験学習のあり方。

第 15 回 全 国 バ ス 学 習 研 究 集 会

止 揚 の 教 育 の 充 実 を め さ し て

兵 庫 県 姫 路 市 立 白 鷺 中 学 校 高 礒 忠 実

1 改訂のねらいと本校の教育

1 改訂のねらい

- 1 人間性豊かな生徒を育てる。
- 2 ゆとりあるしかも充実した学校生活をめさす。
- 3 基礎的、基本的内容を重視し、生徒の個性や能力に応じた教育を求める。

2 本校のめさす、ゆとりと充実した学校づくり

1 人間関係を基盤にした統合的教育を展開する。

ア教育方法の質的転換をはかる。

今日的課題に応じる教育・・・チョークと黒板だけの一斉講義だけでよいか、管理的補導主義をもって教科外での生徒指導で非行問題は解決するか・・・全領域を通して機能的な教育方法を体系化し、その質的転換をはかる必要がある。

イ 統合・止揚の学習のモデル化をはかり、押しすすめる。

- 学力と人間関係（学力を伸ばす指導と人間関係を高める指導の統合）
- 個人的学習と集団的学習（個人の学習過程に関する事実や原理と集団相互作用の過程に関する事実や原理の統合）
- 個人の発達と集団の成長（学級を一つの学習集団として望ましい発達をはかる）の相異なる二つの原理（対立、矛盾する概念も）をそれぞれ統合・止揚し、あるべき姿への人間形成をはかる。

2 統合的教育の充実をめざして

ア. 集団の成長をはかる。

学校での学習過程は、教師と複数の生徒の間で成立するものであり、両者の出会いの場は集団である。

イ. 人間の心を教育の根底におき忘れてはならない。

○手をかける教育

○目をかける教育

○汗を流す教育

3 学習の個別化

ア. 同学年、同学級の枠の中での個別化

○学級集団での学習（教科学習、道徳・同和等教師のまとめによる学習）

イ. セブントタイム（特別活動、生活と学習の基礎訓練を行う生徒指導の学習）

毎日の学習と生活について、自主・自発的な個別化と集団学習によって統合、止揚する。ゴールでは生徒による補足、修正、まとめはあるが教師は取り組みや援助者の立場をとる。

ウ. 同学年、同学級の枠をはなれての個別化

○止揚の時間（ゆとりと充実の時間のための移行措置として実施中）能力、個性、適性に差異があり、学習の出発点においてさえ差がある以上、学年学級を解いて、自学自習的な形態の個別な学習を進める必要がある。この学習の形態は、制度的制約や社会意識からの制約で教科学習では無理としても「ゆとりと充実」の時間には、全人的な人間形成の一領域として考えられる。即ち、生徒の意思を参考にして、学校として設けた学習コースの中から、生徒が選び、課題を構成する。その課題にそって学

習をすすめ、途中では教師の指導や援助を受けるときもあるが、自分で判断し、自分で考え、自分で解決していくインディペンデントスタディとする。課題作成の段階では教師の全体指導はあるが、学習の段階では、自分で考え、個別的に学習を進め、必要なときは、学習集団でディスカッションを行い、集団化をはかりつつ、個々に統合、止揚し、自己評価による再調整を行い学習を終る。

2 「止揚の時間」の実践

日課表

時間	校時	曜日	月	火	水	木	金	土	時間 (注)
8:20	学 活	生徒 朝会						学年 集会	8:20
8:35	準 備	・	・	・	・	・	・	・	8:55
8:40	1 校 時	○	○	○	○	○	○	○	9:00
9:25	準 備	・	・	・	・	・	・	・	9:45
9:35	2 校 時	○	○	○	○	○	○	○	9:55
10:20	準 備	・	・	・	・	・	・	・	10:40
10:30	3 校 時	○	○	○	○	○	○	○	10:50
11:15	準 備	・	・	・	・	・	・	△	11:35
11:25	4 校 時	○	○	○	○	○	○	学話	11:55
12:10	清 掃	△	△	△	△	△	△		12:55
12:30	昼食・休憩								
1:15	準 備	・	・	・	・	・	・	・	
1:20	5 校 時	○	○	○	○	○	○	○	
2:05	準 備	・	・	・	・	・	・	・	
2:15	6 校 時	道徳	○	○	○	○	○	○	
3:00	準 備	・	・	・	・	・	・	・	
3:10	セブントタイム								
3:55									

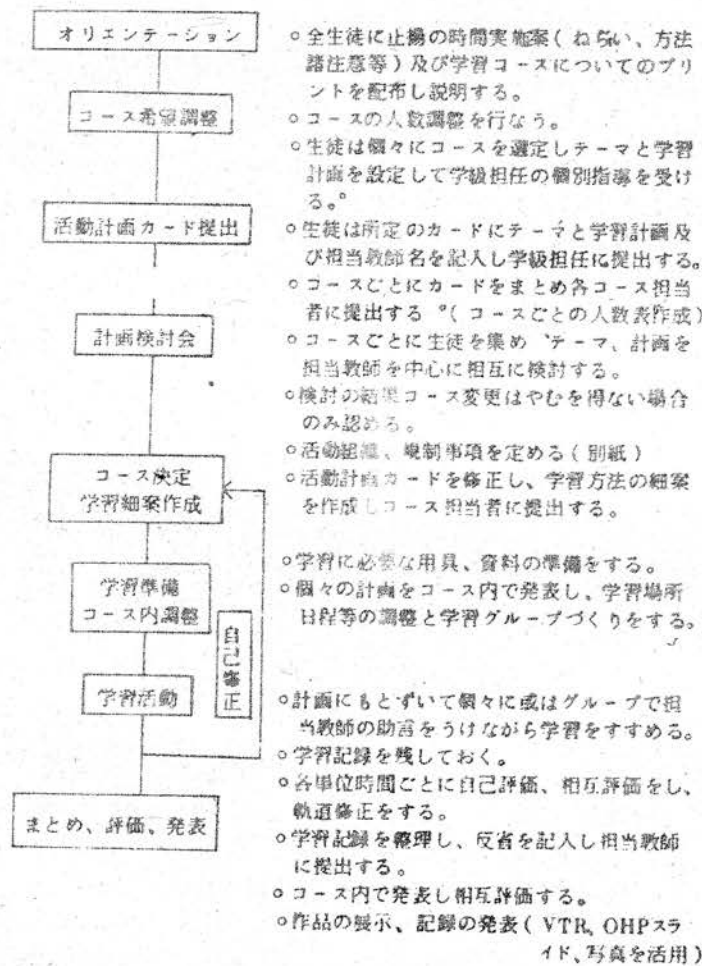
○印は教科

昭和54年度 授業時数の実績

教科等		1年	2年	3年
各 科	国 語	164	165	156
	社 会	134	134	158
	数 学	131	167	156
	理 科	132	132	127
	音 楽	81	81	50
	美 術	71	43	43
	保健体育	133	130	125
	技術家庭	105	103	101
	英 語	127	134	128
道 徳	30	29	27	
特活 別動	学指学活	48	46	48
	ク ラ ブ	30	29	27
合 計	1196	1193	1146	

5. 実施方法

(1) 実施のパターン



出席確認

学習計画検討

学習活動

整理

コース長による(コース毎に出席簿作成)

- 本時の計画を全員発表し相互に検討する。
- 学習場所、手段の調整をする。
- 個別またはグループで、自主的に学習する。

学習記録を記入する。
評価活動(自己、相互)
次時の計画、準備

(4) 単位時間の学習パターンと学習記録

学習記録 年 組 氏 名

コース	学習日		月	日
本時の計画				
学習内容				
担当教師の指導、援助事項				
評価 (観点はコース毎に定める)	自己評価	A	B	C
	相互評価	A	B	C
反省と次時の準備				

第15回全国バズ学習研究会

特別活動における
ゆとりと充実を求めて

広島県豊田郡豊田町立豊中学校

賀戸 文夫

(はじめに)

80年度の新学期をスタートするに当り、特別活動の分野で「ゆとりと充実」を求めるためにどのようにしたらよいかを教職員みんなで模索しました。

討議は主として生徒活動と学級指導に集中しました。これという決定的な案には至らなかったが、「今年度はこれでやってみよう、そしてやって行くなかで、よりベターなものを求めて来年度へつないで行こう」ということ
で出発したわけです。以下はその骨子です。

1. 概要

(1) 月曜日のつと

全校生徒による集会活動と、ひきついでに行なう学校単位・学年単位の活動。

従来週2回の生徒朝会を1回に改め、月曜日の1校時に行なう。

(2) 木曜日の2時間学活

木曜日の5校時から、学活を前半、後半とわけて断続的に実施し、そのあとクラス活動をする。

(3) 毎日の終わりの学活

授業終了後、10分間のHR。

2. ねらいと活動の内容

(1) 月曜日のつと

① ねらい

全校的活動として行ない、集会活動のやり方・あり方を学ばせる。

② 内容

A. 全校生徒による集会活動 (約 25分)

- 各委員会の活動の評価及び課題の報告・提案
- 週間実践の評価及び課題と重点目標の提案
- 学級活動状況の公開報告(学級の意見発表)
- 全員体操
- 行進練習

B. 学級単位・学年単位の活動、又は必要に応じての全校生徒の活動 (約 20分)

※ 全校生徒の集会活動は通常校庭で行なうが、雨天などの時には
体育館で行なう。

(2) 木曜日の2時間学活

① ねらい

- 自主・協同・創造の態度や能力をつちかう。
- 自己の興味・関心・趣味をみつけて意欲を高め、個性をのびす力をやしなう。
- 問題解決の能力と態度をみがく。
- 集団に所属し、集団を組織する力をやしなう。
- 自己の体力を管理し、増強させる。
- 行事を組織し、参加運営する力をやしなう。

② 内容

2時間学活を80分間とし、前半を30分間、後半を40分間とする。前半と後半との間に、準備等のために10分間とる。

A. 前半の内容

主として、次のいずれか或は両者を行なう。

イ. 生徒活動のうちの学級会活動

ロ. 学級指導

B. 後半の内容

学校行事、生徒会行事、或は季節などを考慮して、主として次の内容を行なう。

イ. 生徒活動のうちの生徒会活動

ロ. 勤労・生産的な活動

ハ. 集団訓練

※ 2時間学治の前半・後半の内容は以上の通りですが、年間計画の段階でそれぞれを固定化せずに弾力性をもたせることにしました。

(3) 終わりの学治

① ねらい

- 基本的生活態度の確立を、集団を通して実現させる。
- 集団は個を正しく支えるしくみであることを学ばせる。
- 話す・聞くコミュニケーションの訓練の場とする。
- 生徒による、生徒のための、生徒のものとする。

② 内容

- 基本的生活態度状況の相互確認
服装、健康・衛生、室内整備、学習準備等の点検（各委員）
- 日直や週番などの活動

3. 年間計画

※ 主に、2時間学活の計画を示す。前半、後半のらんの

月	前半後半を通しての課題	前半(30分)の課題
4	1. 新学期を迎えて	2. 係りの仕事と責任
5	2. 新入生歓迎球技大会 3. 生徒総会	1. 課題解決バス
6		1. 課題解決バス 2. 交通安全について 3. 課題解決バス
7		1. 平和の願い 2. 1学期の反省
9	2. 集団訓練	1. 夏休みの反省 3. 課題解決バス
10		1. 強い心とからだ 2. 課題解決バス 3. 課題解決バス
11	1. 校内球技大会	2. 個と集団 3. 課題解決バス
12	1. 生徒会役員改選	2. 2学期の反省 3. 課題解決バス
1		1. 冬休みの反省 2. 課題解決バス
2	3. 卒業生を送る (卒業をまじかにひかえて)	1. 働く意義 2. 課題解決バス
3	1. 予餞会 2. 学級おわかれ球技大会	3. 3学期の反省

同じ数字はペアをあらわす。

後半(40分)の課題	月
2. 校内の整備	4
1. 生徒会本部役員会、学級委員会、専門委員会、教科委員会	5
1. 進路について考えよう (さまざまな職業と将来の希望) 2. 校内の整備 3. 生徒会本部役員会、学級委員会、専門委員会、教科委員会	6
1. 緑化・校地の整備 2. 夏休みの心得と計画	7
1. 2学期を迎えて 3. 緑化・校地の整備	9
1. 生徒会本部役員会、学級委員会、専門委員会、教科委員会 2. 集団訓練 3. 学習方法について考えよう	10
2. 進路について考えよう (将来の希望と計画) 3. 校内の整備	11
2. 冬休みの心得と計画 3. 生徒会本部役員会、学級委員会、専門委員会、教科委員会	12
1. 3学期を迎えて 2. 生徒会本部役員会、学級委員会、専門委員会、教科委員会	1
1. 校内の整備 2. 生徒会本部役員会、学級委員会、専門委員会、教科委員会	2
3. 1年をふりかえって	3

第15回全国バス学習研究集会

中学校3年修学旅行の取り組み

滋賀県神崎郡五個荘中学校

東 澤 理 賢

1. はじめに

子どもの自殺・学校ざらいが続出し、非行の低年齢化が急速に進行している今日の教育荒廃のもとで、学校教育の中では、とくに集団づくりが重視されるようになってきている。ひとりひとりの子どもの学力の充実と豊かな人間形成の教育が行われるためには、子どもたちをひとりひとりバラバラに切り離しては教育することができない。子どもひとりひとりの個性や人格、主権、自由などが生き生きとひき出されていくような民主的な集団をつくるのが、ひとりひとりを個性的に生かしていくことになると考えられる。

1975年、生徒会担当教師から、「自主的・民主的な全校集団づくり」の基本方針が出され、生徒会役員もはじめて自立候補の中から選挙され、充実した生徒会原案が提案されるという前進の第一歩がつけられた。また、何人かの教師が学級集団づくりの実践に取り組み、どの学級も班をつくり、班をどのように活動させるかの実践交流が盛んに行われるようになってきた。その後生徒会行事として、体育祭・文化祭が生徒たちの手でやり切れるようになり、歌声が盛んになり音楽コンクールをめざして、各学級が盛んに歌の練習をするようになった。

2. 修学旅行を通して、最高学年としての自治の力を身につけさせる。

修学旅行は、じっさいは教師集団の管理下で行われることが多い。目的地や宿泊、交通機関の選択などは一年も前から教師が準備にかからねばとうてい確保できないという現状では生徒主体の行事ということにはなりにくい。しかし、部分的にはあるが、生徒の自治がはたらく指導をすることによって、この行事から得るところは大である。3年生がこの一年間、生徒会活動の中心となり、その力量が発揮できるためには、まず修学旅行を充実させる心要有るという認識に立ち、教師集団として、次のことを重点に指導をすすめることにした。

- (1) 修学旅行実行委員会を組織し、旅行中とその前後の活動を通じて、自治能力を身につけさせる。
- (2) こづかいの問題を大きく取り上げ、「みんなできめたことは必ず守る」ことを通して、生活規律を身につけさせる。
- (3) 長崎の平和公園で平和集会を持ち、平和学習の場とする。
- (4) バスの中のレクや、旅行中の各種の集会により、歌声など文化的な活動を自主的に作り上

げる力を身につけさせる。

3. 実行委員会の組織で、修学旅行を運営させる。

数年前の修学旅行は、「学校行事」の名のもとに、企画・運営はすべて教師が行い、また、団体訓練としても位置づけられ、評議員や生徒会役員などのかかわりも、教師の指示によって動くというもので、多くの場合、学年主任や生徒指導の任に当るものが生徒の前に立ち、時には規律からはみ出す者と呼んでは説教をするというものであった。修学旅行は生徒にとっては、教師に引率されているという受身のものであり、楽しいという印象は、旅館の中での枕の投げ合いしか残らないというものであった。

修学旅行を実行委員会形式で行うようになってからは、常に生徒が前面に立つようになった。

4月に入って早々に生徒会執行部6名と各学級2名の評議員は、実行委員会本部を組織し、修学旅行原案を作成し、学年総会を開いてこれを決議した。（資料参考）

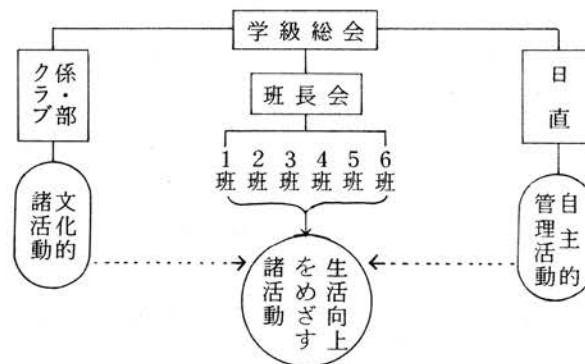
総会原案の内容は、

1. 今の学年の実態
2. 旅行の目的
3. 実行委員会組織表
5. 各部の仕事について
6. 各集会について

と5項目にわたるが、これは、修学旅行を単に物見遊山に終わらせるのではなく、楽しい修学旅行を生徒自身の手でつくり上げる自治的活動とするものである。

4. こづかいを学年総会で決定する。

学級では、「生活向上をめざす自治的活動」を大黒柱として、「自主的管理活動」と「文化的諸活動」を支柱に集団づくりをすすめている。



学年集団づくりも、この学級集団づくりと同じ構造ですすめていくことが可能と考えられるが、実践としては、これを追究するところまではいっていない。しかし、自主的管理活動の一つとしてこづかいの額を学年総会で決定して、これを守る取り組みを行った。（資料参照）

指導としては、違反者が出た場合には、それを克服することに取り組み、学級集団の生活向上

をつくり出したいという考えであった。

修学旅行後、各学級と実行委員会は「修学旅行総括」をまとめ、学年総括総会も開いたが、こづかいについては、実行委員会で次のようにまとめている。

「こづかいは7000円以内とし、実際に使うのはできるだけ5000円以内にしようということだった。5000円というのは守れなかったが、全員がきちっと7000円以内にする事ができた」

違反者への取り組みとして発展させることにはならなかったが、みんなできめたことは必ず守るという集団の規律の典型をつくり出すことができた。

5. 長崎平和公園における平和集会の取り組み

(1) 事前の取り組み

3年生の修学旅行を全校のものにするため、旅行出発前に壮行会を持った。壮行会前には全校各クラスが「ながさき原爆を考える」という資料をもとに平和学習を行った。また、1、2年生の各クラスは平和を願う千羽鶴を折って、壮行会においてそれを3年生に託した。

〔修学旅行壮行会〕

1. 目的

- ① この行事を通して、1.2年生の学級・学年のリーダー候補を発見する。また、そのリーダー候補達に力をつけさせる。
- ② 1.2年生のA・B・C組がそれぞれ兄弟学級を組み、競争的に取り組ませることによって、集団の力を教える。
- ③ この壮行会を通して、3年生には、旅行を単なる物見遊山的に終らせるのではなく、最高学年集団にふさわしい旅行をつくり上げる決意をさせる。
- ④ 被爆地長崎を訪れることを重視し、この機会を平和教育の機会とする。

2. 主催生徒会（1.2年生の役員と評議員で実行委員会を組織し、計画運営させる）

3. 日時 4月19日（土） 4校時

4. 内容 司会のことば

1.2年生が千羽鶴を3年生に託す

校長先生のはなし

原爆のはなし

兄弟学級団の壮行アピール

3年生の決意表明

歌声 「原爆許すまじ」「青い空は」

(2) 長崎平和集会

修学旅行の目的第5には「戦争のおそろしさや、非道さを知り、平和の喜びをかみしめて考える機会とする」とかかっているが、平和公園では次のような平和集会をもった。

1. 開会のことば

2. 詩の朗読

3. 黙とう 千羽鶴の献納

4. 会 唱 「青い空は」
5. 決意表明（各クラス）
6. 閉会のことば

(3) 平和集会における決意表明

3年B組平和集会決意表明

評議員 私たち五個荘中学校の3年生は、修学旅行で「戦争と平和について」少しでも知るために、この長崎までやって来ました。

私たちは戦争というものを経験していません。だから、「戦争」のほんとうのおそろしさ、非道さというものはわかりません。ただ、本で読んだり、写真で見たことはありますが、ほんとうの戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろしさというものは、そんなものだけではあらわしきれないほど、むごいものであったと思います。

1945年8月9日、一瞬にして、何の罪もない多くの人々が、この地球上から消え去ってしまいました。なんとか生き残った人々も、その多くはひどいやけどのためになくなってしまったという。私たちはそんな事実を、ただ「戦争は恐ろしいものだ」「原爆とは恐ろしいものだ」といって、それだけですましてしまってよいのでしょうか。たしかに、今私たちは平和な毎日を送っています。

しかし、この平和のかけには、

全 員 「この平和のかけには」

評議員 はかり知れないほど多くの人々の、

全 員 「はかり知れないほど多くの人々の」

評議員 苦しみがあつたことを忘れてはならない。

全 員 「苦しみがあつたことを忘れてはならない」

評議員 現在、地球上にある原水爆が戦争に使用されたら、この地球が4.5回で壊滅すると言われている。そんなことをさせないためにも、この地球上から一刻も早く原水爆をなくし、二度と戦争を起こさぬことを決意します。

全 員 「二度と戦争を起こさぬことを決意します」

評議員 そして、ほんとうの平和をこの地球にとりもどすことが、

全 員 「ほんとうの平和をこの地球にとりもどすことが」

評議員 われわれに残された使命であると思います。

全 員 「われわれに残された使命であると思います」

評議員 私たち3年B組は、以上のことを決意表明します。

昭和55年4月20日

滋賀県神崎郡五個荘町立五個荘中学校 3年B組一同

(4) 平和集会についての総括

修学旅行総括において3年A組は、この平和集会について次のように述べている。

平和集会では戦争を二度としてはいけないということと、平和を守らなくてはいけ

ないということを決意した。このことは決意するまでもなく人間としての責任だと思う。

国際文化会館の展示物を見学した時、そのむごたらしさが目に焼きつけられた。その当時の写真や遺品を見ると、悲惨だという印象だけではなく、戦争や原爆に対しての怒りと、二度と戦争を起こしてはいけないという決意が、みんなの心に伝わった。お母さんのおなかの中で死んでしまっている子、原爆症で苦しんでいる人々……。今まで、原爆や戦争というものを軽く考えてしまっていたが、この平和集会と文化会館の見学によって、私たちの気持ちは変わってしまった。今、私たちにできることは、被爆者の霊をなぐさめ、毎日原爆症と戦って生きている人々を助け、決意したことをしっかり守り、平和を守り通すことである。

6. バスの中で合唱コンクールを行う。

実行委員会は第2日目の夕食のあと学年総会を開いて「合唱コンクール」を提案した。3日目の別府から荇田港へ向う途中が約3時間もあり、その時間を利用して学級別班対抗合唱コンクールをやろうというものである。

合唱コンクール原案

1. あすの別府から荇田港へ向うバスの中で班別対抗合唱コンクールを行おう。
2. 曲目 (1) 課題曲 「長崎の歌」または「阿蘇恋歌」
(2) 自由曲 なんでもよい
3. 審査 班一票制とガイドさん (自分の班は審査しない)
4. 表彰 最優秀賞・チームワーク賞 (学校に帰ってから実行委員会が表彰する)

3日目のバスの中は班別に合唱コンクールの練習がはじまった。長崎でバスガイドに習った「長崎の歌」の復習をし、阿蘇の山なみを窓からながめながら「阿蘇恋歌」の練習をした。各学級に一班ずつきめられているレク指導班の司会で合唱コンクールを実施して、修学旅行中の一つの文化活動とすることができた。

7. 総括において「船中深夜徘徊」を追求する。

3日目の夜はサンフラワー号の船中で過ごすことになったが、実行委員会は夕食後に室長会を召集し、10時半までの行動は自由とするが、10時半に消燈、就寝とすることを決めた。ところが12時をすぎたころ教師が見まわりをしていると数人の男子生徒が女子生徒の部屋に潜んでいるところを発見。その場では本人に対する教師の指導ですませた。

このことについて、男子生徒の所属するA組・B組では各学級の総括で次のように述べている。(要旨)

A組

他のクラスの女子の部屋にA組の男子が消燈時間を過ぎたほぼ夜中に行っていた。本人たちは、その部屋に入るために外へ出たのではなく、暑苦しく、なかなか寝つかれないので外に出ていたら、その部屋の女子に誘われるように入ってしまった。この

問題について、A組としては集団生活のマイナス点になってしまった。3年生という自覚のなさが原因と考えられる。

B組

「エンジンの音、暑い、などの理由で寝られなかった。注意すべき人（リーダー）がいなかったから気がゆるんだ」などの理由で就寝時間を守れなかったのは、本人とその部屋の室長、その人の属する班長、評議員の自覚がなかった。みんなが自覚をもって行動すれば、学級はもとより、学年・学校全体としても、もっと向上するのではないか。

8. ま と め

3年生のスタートとなる時期に生徒が主体となる修学旅行に取り組んで、今後の全校における指導者集団としての自治の力を養う意味において、一応の成果をおさめることができた。

修学旅行という一つの行事を教育の中に位置づけていくために、次の二点に触れてまとめたい。

まず第一は、修学旅行は修学旅行という範囲の中だけで追求するのではなく、日常の教育の内容や活動とどうかかわらせるかということが重要であるという点である。

修学旅行だけを切り離して実践した場合には、それをどんなに工夫してうまくやっても、それが終わればそれだけのものという価値に止まってしまうが、日常の教科指導や生活指導とかわらせることにより、準備の段階、旅行中、あるいは終了後に行うさまざまな活動は、教育的な価値として生きてくるものと考えられる。その場合に、指導する側としては、いかにしてその価値を仕組んで生徒の前に提供していくかということが課題となり、この点今後工夫の余地があると考えられる。

第二は、なぜ修学旅行を通して学年集団づくりに取り組んでいるかということである。

前述のごとく、生徒は学級で班をつくり、学級の生活を通して民主的な組織原則や行動原則を学んでいくわけであるが、40人前後の学級の中では、自からそこに限界もある。学級で得た力を学年集団や全校生徒会の中で発展させていくことは、彼等が将来を荷なう地域の一人として、どう成長させていくかという課題と大きくかわるからである。この意味において、3年においては、学級集団を育てることとともに、3年生集団としての取り組みを重視しているわけである。

第15回全国バズ学習研究集会

障害児教育 社会に適應できる人づくり

障害の種類や程度に応じた教育方法と場のくふう

兵庫県尼崎市立啓明中学校

山本正三

私の10数年の障害児教育で得た障害児教育の基本的理念は、障害生徒を健常生徒と同じ権利・義務の主体として学習・基本的生活を保障することだと思っています。また、障害生徒を健常生徒のなかに「水ましの存在」としておくのではなく、障害生徒として健常生徒のなかに明確に存在を確認させることだと思っています。私の障害児教育の取り組みのなかで、校長・同僚教師・生徒と共に、真剣な話し合いと実践で創られたいくつかの基本的理念にまついた例を発表いたします。

1. 教科指導について

中学校における教科指導は、教科指導の各分野について、障害生徒も含めて、全校生徒が学ぶ権利・義務をそれぞれの全職員が当然に考えなければなりません。

- (1) 障害生徒は、障害の程度・特に大きなものが存在しますので、障害児学級の教科指導は、教科の担任・教科内容・時間割りの配慮・特別教室の使用を、特に重視されなければなりません。

- (2) 障害児学級の教科担任は、当然に教科の免許状を所有していることを原則としています。しかも、障害生徒・障害児学級に理解を示し、指導法に堪能な教師が望まれます。
- (3) 障害児学級のコア教科を国語・算数・養護・訓練としています。コア教科は、障害児学級担任が担当することとしています。障害児学級担任が国語・数学の免許状を所有していない場合は、国語科・数学科の教師より指導を受けるようにつとめてきました。
- (4) 障害児学級の教科の自習時間が生じた場合は、その教科担任がその教科の他の担任を自習指導にあてるようにしています。ただし、教科担任の補充が不可能な場合は、当番学年から教師を補充することになっています。
- (5) コア教科の数学は個人別指導をとっています。国語は、各単元を劇化して、情緒の表現指導を重視しています。養護・訓練は後に述べるとおりです。

2. 養護・訓練について

(1) 宿泊訓練の実施

- ① 障害児学級単独で宿泊訓練を、各学期に1回、年間3回、六甲山・淡路島のユースホステルを使って実施しています。それ以外に、各学年の宿泊訓練にも参加しています。
- ② 宿泊訓練をとおして、母子分離の経験・身辺自立訓練・望ましい生活態度を身につけることをねらいとしています。

- ③ 夜のゲーム・ミーティングをとおして、級友相互・教師との人間関係のきずなの充実をはかっています。

(2) パーティー学活の実施

- ① 学期の始めと終り・中間テスト期間中、障害生徒により計画されて、家庭科教室で調理・パーティーを実施します。
- ② 調理用材料の購入をとおして金銭の使用経験を持たせます。
- ③ 材料の購入・調理をとおして、級友相互の協力の経験をさせます。
- ④ できあがった料理を食べながらゲームなどをやって、級友相互・教師との親睦をはかります。

3. 健常児との交流について

原則として、障害児学級と普通学級の学級交流をとおして、障害生徒と健常生徒との交流をはかっています。

- (1) 「体育」の授業を、5組(障害児学級)・6組の合同授業として実施しています。
- (2) 体育祭・球技大会では、サッカー・バレーボール・リレー等で選手がたりぬときは、各クラスより応援選手を選出してもらって、5組としてリーグ戦等に参加しています。
- (3) 「体育」以外の教科については、障害生徒の個々の障害の実体及び能力に応じて、「協力学級」に行き、それぞれの教科の授業を受けています。

4. 学校としての障害児学級への配慮

- (1) 3月末、職員会議では、障害児学級経営の1年間の反省と新年度計画を先議事項としています。
- (2) 副担任を決定し、副担任所有の免許教科は、必ず副担任が担当することとしています。さらに、宿泊訓練・学活に参加できるように時間割りの配慮をおこなってそろっています。
- (3) 障害児学級担任・副担任は、1～3年の各学年に所属し、障害児学級経営の情報交換と普通学級の障害を持った生徒の情報指導の交換をおこなっています。
- (4) 時間割り・特別教室の使用割り当てについては、障害児学級を第1に決定することとしています。
- (5) 「技術・家庭」の授業については、教科担任と障害児学級担任の複数でおこなっています。
- (6) 各教科で使用する障害生徒の教材費は無償とし、年度当初に学校予算のなかに、障害児学級用消耗品費として設定していただくことになっています。
- (7) 全校在籍表・学年在籍表における障害児学級のカッコ書き書きこみを廃止しています。
- (8) 学年連絡箱を5組として各学年学級のまんに設置し、配付物のモシのないように心がけています。
- (9) 生徒会活動については、生徒会各委員会を5組の委員が委員会の責任と任務を実行できるように、生徒会執行部・各委員会

係教師と障害児学級担任とで指導上の留意点について話し合う機会をもうけています。

- (10) 修学旅行・遠足等を使用するバスの割り当ては、「5号車」は5組のバスと指定し、座席割り当ては普通学級の一部が「5号車」に乗りこむ形式をとっています。宿舎について「5号室」は5組の部屋と指定しています。

5. 障害児学級担任として

- (1) 中学校入学説明会・入学式で、約30分間位の障害児学級の位置づけ・意義を、新1年生の親子に話しをしています。
- (2) 校区内小学校の障害児教育校内研修会に積極的に参加し、小・中の連絡を強めています。
- (3) 小・中の育友会研修会にも積極的に参加し、障害児教育の重要性の啓蒙につとめています。
- (4) 障害児教育で得たそろそろの経験・研究を同僚教師に役だてていただくための校内研修会を実施しています。
- (5) 普通学級の障害を持った生徒・問題行動を持った生徒の教育相談・治療活動を積極的におこなっています。

6. まとめ

私の10数年におよぶ障害児教育は、とどされた教育から、ひらかれた教育へと変容していく教育でありました。私の先輩・同僚教師のおしみなない協力のたまものでありました。

ひらかれた障害児教育への変容は、障害生徒とその子の親の人生がひらかれていく変容でもあったと思います。ある障害生徒の親が言いました。「90kgもある私の娘の身のおける場所が、この世の中にあっただのですね。」「雨の日、小学校へ行くのをいやがる子を自転車にのせて、ぬかるみでこけて、共に泣いた日がうそのようです。」

私が障害児教育に取り組んだ当時の障害生徒は、昼食時におちやびんをもらいに行くときか、便所に行く以外は、教室の外に出ることはなかったそうです。体育祭では100m競争を走ったあとはじっと見学していただけだそうです。

現在の障害生徒は、積極的に教室を出て、運動場で遊んでいます。体育祭・球技大会は、はずかしい大会でなく、普通学級の仲間を支えられ友情をたかめる機会になっています。文化祭は障害児学級の学習の成果をみんなに知ってもらう機会となっています。

障害生徒の親達も、参観日・体育祭・文化祭を楽しみにして、胸をはって登校してきます。

登校拒否生徒・緘黙生徒は、明るく話し登校してきます。

卒業生は、落ちこぼれ卒業生でなく、実社会に定着し、仕事をうけて社会の第1線で生きがいを感じつつ活躍しています。

「障害をのりこえ社会で生きぬく人づくり」
—障害に甘えない子の育成をめざして—

姫路市立城南小学校 大畑 穂

○ はじめに

最近の就学指導で3組の母子に会った。難聴幼児であるが、母親の1人も聴覚障害者であった。児童には常に接していても大人には不慣れのため、健聴者である2人の母親にレポートをとって欲しいと考え「うまく対話出来ますか。」と尋ねた。ところが「事務的な連絡くらいなら出来るが、あまり話はしない。」とのことである。その理由をよく尋ねてみると、その話し方は筆談を併用しても連絡程度で会話にはならず、ちょっとしたくい違いでもすぐに怒ってしまい融通性がないので大変むずかしいので、あまり話をしない、ということである。そこで「あなたのお子様も将来仲間が話したからなければ寂しい思いをするのではないですか。」と非難の態度を大いに表わして話したところ「だから考え方や行動に幅のある子どもにしたい。」という答が返ってきた。つまり、相手の気持ちや立場を考えて会話が出来、うまく人間関係が作れる子に育てたいとの願いである。

難聴の子を持つ親にしてこのような状態である。ましてや一般の人々は…と考えると、背筋の寒い思いがする。こういう扱いの多いこの社会で、障害を持った人々が、たくましく生きるということは、真に困難の多いことである。一方、見方を変えると、障害を持っている側にも問題があることがわかる。それは、常にだれかが何かをしてくれると思いき、自らは自分の殻から出ようとしなないところである。つまり、障害に甘えるという行為が身に付いてしまっているといえる。これは、教育に負うところが大きい。

ここでは、この障害に甘えるという行為を身に付けさせないために、何をどのような場で指導すべきかを、考えていきたい。

1. 甘えについて

児童の発達段階や場の状況など様々な要因が絡み、甘えの判断は困難であるが、ここでは「聞こえにくいということを口実に、出来ることにも積極的に取り組もうとせず、他人の援助を待つような行為」とする。例えば、先の母親の、積極的に他の母親の中に入っていかうとせず、うまく話が伝わらないと怒るような態度もこれに該当すると考える。

2. 学級の実態

(1) 学級の構成と児童数

組		大畑		井口		沢田		計
学年		1	2	3	4	5	6	
人数	男	0	2	3	0	2	3	10
	女	4	3	2	2	3	3	17
合計		9		7		11		27
交流学級		1-1 高馬	2-1 平井	3-1 山下	4-1 福田	5-1 松本	6-2 森本	

(2) 平均聴力損失

聴力区分・dB	学年別児童数						計
	1	2	3	4	5	6	
61~70			3			1	4
71~80		2				2	4
81~90			1	1	1	2	5
90以上	4	3	1	1	4	1	14

(3) /年生の児童の実態

- A 児：女兒・聴力損失（右耳107dB 左耳107dB）・一般幼稚園より難聴の発見が遅く補聴器を装用して/年
- B 児：女兒・聴力損失（右耳101dB 左耳91dB）・ろう学校幼稚部中途難聴（4才の時に聞こえにくくなった）
- C 児：女兒・聴力損失（右耳105dB 左耳100dB）・城南幼稚園（難聴学級）・妹（/才下）も難聴・補聴器両耳装用
- D 児：女兒・聴力損失（右耳107dB 左耳96dB）・城南幼稚園（難聴学級）

3. 甘えの実態

(1) あいさつ・返事

気持ち良く出来ることが、人間関係をほぐす上に大切である。
対人関係の硬さや口の重さから気軽に出て来ないことが多い。
交流学級からの帰りに「さようなら」から「またこんどね」「またあそ

ほうね」のあいさつに変え、健聴児がしてくれる。

(2) 身辺処理

自分の事は自分でする習慣を身につけること—後片付け、忘れ物

小さいころより、治療や訓練に時間や気をとられ、基本的なことも自分で処理する習慣が身につけていないことが多い。交流学級で、道具の片付けや掃除をしないで帰って来ることがある。

(3) 友達の名前

交友関係の第一歩は、互いの名前を呼び合うことから始まる。

健聴児から名前を呼ばれることは多いが、自分から友達の名前を呼ぶことができない。これは、言えないためではなく知らないためである。最近になって2・3人の名前が覚えられたようである。「Aちゃんがわたしの名前を言ってくれたよ。」と、うれしそうに報告してくれた健聴児があった。真の友達になるために、一日も早く友達の名前を覚えることが必要である。

(4) 係の仕事

互いの役割を果たすことは、集団生活を送る上で大切なことであり、それが出来てこそ、認め合える仲間になれる。

だれかがしてくれる、してもらってあたりまえ、という甘えた気持ちから抜け出し、学級の仕事は自分でする、という気持ちを持たせて係の仕事に取り組ませなければならない。きびしさの中に、助け合う心も育つ。

4. 実践

(1) 難聴児

難聴学級で、個別に、不備な点を強化・補充していく。

聴能訓練・言語訓練・教科指導・生活指導

交流場面での指導を強化する。

F M 補聴器の装用

難聴学級の担任も交流学習の指導にあたる。

交流学習の内容は、音楽・図工・体育と特活・学校行事などである。

(2) 健聴児

難聴ということについての理解を深めるとともに、同じ学年の友達であるという気持ちを持たせるようにする。

具体的な接し方を指導する

「これは、Bちゃんにもできるから、させてあげて。」

「大きな口をあけて、口が見えるようにおはなしをするといいよ。」

など、とくに低学年の児童には、その場で具体的な事柄を取り上げて指導していくことが大切である。

(3) 教師間の連携

交流学級担任者会を持ち、連絡を密接にすることにより、指導に一貫性を持たせるようにする。個々の児童により、何が甘えて何が障害かを判別し、その実態に応じて指導していかなければならない。

／年生の授業担当者

学級担任・交流学級担任・言語学級担任・音楽専科

(4) 親との連携

どの項目も、学校生活のみで身につくものはない。家庭での生活の中で、習慣化し定着させていかなければならないことが多い。

連絡帳・日刊学級通信の発行—学校での生活の様子を知らせる。

家庭での生活の様子を知らせる。

保護者会・親の会—学校での生活の様子を観察する。

親同士が意見や情報を交換し視野を拓ける。

親子キャンプ・家庭訪問—実際の生活の様子を観察しながら指導する。

(5) 医療機関との連携

聴覚や補聴器の管理と指導に必要である。

5. 反省と今後の課題

これらの児童は、難聴という障害を持っているが、健聴の同じ年令の児童と何ら変わらない子ども達である。教育の場において、障害に対して特別の手だては必要であるが、健聴児と同じように扱われなければならない。

交流学習を行い、広い子どもの世界の中で、たくましく生きる力を育てようとしている。その生活の中に、障害に甘えたところの点検をしてきて、実は、難聴だからしかたがない、と半ばあきらめたようなところが、指導している我々にあることに気付いた。

今後、児童の側からと指導者である教師や親の側からの両面から点検し、指導の内容や交流学習の方法を考えていかなければならない。

ほうね」のあいさつに変え、健聴児がしてくれる。

(2) 身辺処理

自分の事は自分でする習慣を身につけること—後片付け、忘れ物
小さいころより、治療や訓練に時間や気をとられ、基本的なことも自分で処理する習慣が身につけていないことが多い。交流学級で、道具の片付けや掃除をしないで帰って来ることがある。

(3) 友達の名前

交友関係の第一歩は、互いの名前を呼び合うことから始まる。
健聴児から名前を呼ばれることは多いが、自分から友達の名前を呼ぶことができない。これは、言えないためではなく知らないためである。最近になって2・3人の名前が覚えられたようである。「Aちゃんがわたしの名前を言ってくれたよ。」と、うれしそうに報告してくれた健聴児があった。真の友達になるために、一日も早く友達の名前を覚えることが必要である。

(4) 係の仕事

互いの役割を果たすことは、集団生活を送る上で大切なことであり、それが出来てこそ、認め合える仲間になれる。

だれかがしてくれる、してもらってあたりまえ、という甘えた気持ちから抜け出し、学級の仕事は自分でする、という気持ちを持たせて係の仕事に取り組みせなければならない。きびしさの中に、助け合う心も育つ。

4. 実践

(1) 難聴児

難聴学級で、個別に、不備な点を強化・補充していく。

聴能訓練・言語訓練・教科指導・生活指導
交流場面での指導を強化する。

F M 補聴器の装用

難聴学級の担任も交流学習の指導にあたる。

交流学習の内容は、音楽・図工・体育と特活・学校行事などである。

(2) 健聴児

難聴ということについての理解を深めるとともに、同じ学年の友達であるという気持ちを持たせるようにする。

具体的な接し方を指導する

「これは、Bちゃんにもできるから、させてあげて。」

「大きな口をあけて、口が見えるようにはなしをするといいよ。」

など、とくに低学年の児童には、その場で具体的な事柄を取り上げて指導していくことが大切である。

(3) 教師間の連携

交流学級担任者会を持ち、連絡を密接にすることにより、指導に一貫性を持たせるようにする。個々の児童により、何が甘えて何が障害かを判別し、その実態に応じて指導していかなければならない。

／年生の授業担当者

学級担任・交流学級担任・言語学級担任・音楽専科

(4) 親との連携

どの項目も、学校生活のみで身につくものはない。家庭での生活の中で、習慣化し定着させていかなければならないことが多い。

連絡帳・日刊学級通信の発行—学校での生活の様子を知らせる。

家庭での生活の様子を知らせる。

保護者会・親の会—学校での生活の様子を観察する。

親同士が意見や情報を交換し視野を拓ける。

親子キャンプ・家庭訪問—実際の生活の様子を観察しながら指導する。

(5) 医療機関との連携

聴覚や補聴器の管理と指導に必要である。

5. 反省と今後の課題

これらの児童は、難聴という障害を持っているが、健聴の同じ年令の児童と何ら変わらない子ども達である。教育の場において、障害に対して特別の手だては必要であるが、健聴児と同じように扱われなければならない。

交流学習を行い、広い子どもの世界の中で、たくましく生きる力を育てようとしている。その生活の中に、障害に甘えたところの点検をしてきて、実は、難聴だからしかたがない、と半ばあきらめたようなところが、指導している我々にあることに気付いた。

今後、児童の側からと指導者である教師や親の側からの両面から点検し、指導の内容や交流学習の方法を考えていかなければならない。

— はじめに —

学級の目標

- (1) 障害をのりこえるたくましさ、社会に適応できる豊かな人間性を養う。
- (2) その子のもつ能力や特性を十分に伸ばしながら、ともに助け合い、励まし合う学級の育成。

上記の目標達成のために、どうしても2つの集団が必要だと思われる。

その1つは、普通学級集団であり、もう1つは当然、障害児学級集団である。

障害をもつ子どもたちは、健常児との交流を通して、社会ルールを身につけたり、見て習ったり、時にはがまんするつらさをも経験しながら、豊かな人間性を高めていく。

しかし、当然のことながら、知的学習面ではどうしてもついていけないし、能力を十分に発揮することはできない。

そこで、障害児学級における、個々の能力に応じた、きめの細かい指導が必要になってくる。

以上のような考えにたって、与えられたテーマにとりくんでみたい。

I. 交流を有意義に進めるために

1. どの生徒も、該当学年に交流学級をもつ。そこでは、社会性を身につけ、対人関係を広め、深めていくことをねらいとする。
2. 交流学級において、保健体育、道徳、特別活動、学校行事を行うことを原則とする。
3. 全職員の共通理解を得るために、「生徒の実態表」を作成し、配布、説明して理解を深めていく。
4. 交流学級担任とたえず連絡をとり、障害をもつ子にも、もたない子にも、共に意義のある交流になるように考えていく。(トラブルを生かしていく)
5. 親、子どもの願いを十分に受けとめ、子どもの実態をもしっかりは握して交流の方法、場などをくふうしていく。

※ 実践

1. 生徒の実態

7年B子・ダウン症候群・IQ 35・弱視・斜視・肥満
頭髪は上部がはげおちている・身辺処理は何とかできる
小学校では情緒障害児学級に在籍・出席率は50%以下
母親に過保護に育てられており、非常に依存的

2. 交流の過程

一見して異様な感じの B子に、入学当初はどの生徒も（教師までも）とまどいをみせていた。みんなと同じようには、階段の昇降もできない。
＊交流の原則、にとってもあてはめられない。

4月

交流学級の生徒に、B子の障害のこと、みんなと一緒に何を学ぶか、みんなにどんな接し方をしてほしいかなどを話す。

所かまわずスカートをめくって足をかいたり、ねころんだりするB子に対して、珍しいものでも見るような子どもたちであった。

5月

2泊3日の宿泊訓練。

はじめて精薄学級担任の保護を離れ、多くの仲間と寝食をともにする。

何とかみんなについて行こうとする態度がはじめてみられる。

同班の生徒が、すべてのことに手をかす。これでは交流の意味がない。

「何もかもをしてあげることが、真の親切ではない」と話し合う。

このようななかで、交流学級の子どもたちは、重い障害をもつB子への正しい接し方を少しずつ学んでいった。

9月

学年集会、学活の時間など、交流学級の中で、みんなと同じように座って話がきけるようになった。特異な行動もほとんど見られなくなった。

10月

体育大会には、小学校の時は一度も参加したことがないという。

できるだけ参加させよう——と交流学級担任とも話し合い、徒競走以外は全てに参加させる。

はじめて、白鷺体操をした時は、じっと座りこんで動こうとしなかった

が、2度目からは、見よう見まねで動き始めた。すかさず、そばにいた先生がほめる。

2週間の練習期間中、交流学級の担任をはじめ、多くの先生方の温かい目が注がれ、交流学級の生徒たちの励ましや協力が、おしみなく続けられた。E子自身もまた必死でがんばり、とても意義深い体育大会であった。

小学校の時は、欠席と遅刻が一日おきに続けられていたというが、今では欠席も少なくなり、元気に通学してきている。(何よりも母親の態度が変わった)

〈資料〉今までの出席状況

4月	$\frac{\text{病欠}7 \quad \text{遅刻}12}{19\text{日}}$	5月	$\frac{\text{出停}9 \quad \text{病欠}1 \quad \text{遅刻}10}{24\text{日}}$
6月	$\frac{\text{出停}10 \quad \text{病欠}1}{25\text{日}}$	7月	$\frac{\text{病欠}0 \quad \text{遅刻}4}{17\text{日}}$
9月	$\frac{\text{病欠}2 \quad \text{遅刻}7}{23\text{日}}$		

3. ふり返って

障害の程度の重いE子の場合でも、「交流」の可能な部分においては、上記のように、親も教師もが驚くほどの成長のあとがみられた。

また、障害をもたない交流学級の子ども達も、この半年の間に、障害児に対する正しい認識を深めながら、少しずつ成長してきているように思われる。この輪が、交流学級にとどまることなく、全校的に広がるのが大切だろう。

II. ひとりひとりを大切にしたい個別指導

1. 生徒の実態は握

(1) 個人表作成

生育歴、家族構成、家庭環境、諸検査(知能検査、学力検査、性格検査) 身体測定記録、スポーツテスト、学習記録、生活チェック表、性格・行動チェック表、入学以後の日々の記録 etc

(2) 生徒の実態

学年	氏名	障害の程度	特性等	学習の実態
3	A男	中度の難聴 精神発達遅滞	言語理解がほとんど できない まじめで、集中力がある	1000までの数を理解している ことばを使っての学習は 困難
2	B子	中度の精神薄弱	引っこみ思案 動作が鈍い 下級生に親切	計算は具体物を使わない とできない カタカナが不十分
2	C子	軽度の精神薄弱 (場面かん黙)	ずる休みが多い 本学級のリーダー格	小3程度の学力をもつ /対/の学習だと、非常に 理解がはやい
1	D子	軽度の精神薄弱	内気 ことばが不明りょう	100までの数を理解している 短文なら書ける
1	E子	中度の精神薄弱 (ダウン症) 弱視、斜視	明るくて人なつっこい 集中力がない	20までの数唱と5までの 加減算しかできない 大人びた話し方をする

2. 教育課程と指導形態

	月	火	水	木	金	土
1	国	社	理	数	理	体
2	体	音	国	理	技	美
3	技	国	体	社	美	国
4	音	社	社	英	数	学
5	英	数	止	技	技	
6	道	英	揚	〃	〃	

- (1) 日常生活指導、生活単元学習、作業的な学習をとり入れながら、主に教科学習の形態をとっている。
- (2) 能力差が非常に著しいため、○印は複数担任(能力別or性別)
- (3) 3年A男に「養護・訓練」を特設し、言語・聴能訓練を行う。

3. 年間指導計画と目標

各生徒の学習進路に合わせた指導内容を具体的に設定し、段階的に学習の積み重ねができるように配慮する。 一略一

4. 教育設備の充実と教育機器の活用

- (1) 教育環境を整える。(学級要覧 参照)
- (2) 障害に応じるために
 - ① 難聴児のA男は、難聴教室において「養・訓」の指導を受ける。
 - ② 弱視のB子に、書見台使用。
- (3) 能力に応じた学習のために
 - ① OHP、シンクロファックス、VTR等の活用・・・数、理、英、国
 - ② 自作教具の使用・・・日常生活指導、数、国

III. 生活パスを通して、励まし合い、支え合う仲間づくり

1. 意義

能力に応じた特別指導、あるいは社会性を育てるための交流などで、子どもたちは「生きる力」を徐々につけてきている。しかし、まだまだ受けみ的な場面が多く、障害をもつ子ども同士が相互にかかわり合って、伸びていくことが少ないようである。

そこで、昨年度より、特に生活パスをとり入れて、子ども達が主体になってお互いに励まし合い、認め合いながら、共に高まっていくような集団づくりを進めてきた。

2. 方法

- (1) 生徒の実態表から、個々の生活目標を決める。そして、生活面の改善を目的とした特別指導を、SHとセブンタイムに実施する。
- (2) 生徒がリーダーになって会を進める。
(全体リーダーはC子、部分リーダーはB子)
- (3) 学校における生活の反省(生活目標、清そう、学習態度など)を主に行う。
- (4) 生活ノートを活用してセブンタイムを進め、その日の反省を記録していく。
(ノートは能力に応じて2種類作成)

3. ねらい

- (1) 毎日の生活、学習、健康などの点検を通して、「少しでもよくなるよう」「よくしていこう」という前向きな生活態度を身につけ、自己訓練のできる生徒になること。
- (2) 友だちの生活態度にも目を向け、認め合い、励まし合い、注意し合って、共に高まっていく生徒になること。

4. /年半がすぎて

昨年の5月に、教師のリーダーで出発したセブンタイムも、今ではすっかり生徒の手に渡っている。

普通学級にみられるような活発さはまだ見られないが、それでも5人の生徒がそれぞれに、お互いの生活態度を指摘したり、反省し合っている。

日番の仕事を点検するB子は、「〇〇さん、花に水をやりましたか。」とはっきりと質問し、(彼女のことははっきり聞けるのはこのときだけである)日番の生徒が答えないと、サッと立って窓側の植木鉢の土に手をふれ、「水やってないよ」と言うのである。

ダウン症のE子は、生活の反省覧にX印をつけられるのがとてもいやで、〇印がほしいためにがんばることもある。

個々の生徒により、多少の差はあるが、生活パスを行ってきた効果が、少しずつ実生活にも生かされてきたように思われるこのごろである。

Ⅳ. 今後の展望

1. 生徒の発達段階をしっかりとふまえて、交流の方法、場などの検討を重ねながら、意義のある交流のあり方を求めていきたい。
2. 障害の程度、種類の多様化に伴う指導法(特にダウン症)をさらに研究する必要がある。
3. 抽象的な思考や、ものごとを深く考えることのできにくい子ども達であるが、より効果的な話し合いの仕方をくふうしていきたい。

分科会討議の柱

小学校 低学年部会 「仲間意識の充実」

- なんでもいえる学級になるため
 - 1 グループの編成
 - 2 入門期の話しあい方のしつけ
 - 3 教師の助言
- 総合的な学習指導について
 - 1 子どもの生活に近い単元構成のしかた
教科の組合せ方・時間の配当
 - 2 興味と関心を深める課題設定の工夫

小学校 中学年部会 「個人思考と集団思考」

- 1 ひとり学習のさせ方
- 2 個人の考えを全体に、どう反映させるか
- 3 学習の場に応じるパス
- 4 単元構成のしかた
- 5 中学年としての仲間づくり

小学校 高学年部会 「相互活動の充実と多様な思考力の育成」

- 1 単元全体の学習の見通しをつけさせる工夫
- 2 個人の考えをグループ全体のなかで生かすための工夫
- 3 即即時評価のさせ方
- 4 態度目標の具体化
- 5 話し合いの場における教師の配慮

中学・高校 学習指導部会 「学力と人間関係」

- 1 単元指導計画の構成について
- 2 学習効果を高める課題の提示
- 3 個人差を克服して、全員参加のパスになるための工夫
と配慮
- 4 認知力と態度の評価

丸いまま

初等時話し合いのしかた
後述の如く
同じ話し合いのしかた
Free talk のみ

小学校

話し合い - 18年4月20日

元組

話し合い
一人ひとりの考え
話し合いの場
話し合いの場

話し合い
話し合いの場
話し合いの場

話し合いの場
話し合いの場

中学・高校 生徒指導部会 「生活指導のあり方」

- 1 個を生かす集団づくりの工夫
- 2 教科外活動におけるバス・・・生徒会・学級会・学級指導
クラブ活動・部活動・その他
- 3 校外・家庭生活におけるバス

新教育課程部会 「ゆとりと充実をめざす指導」

- 1 ゆとりのある、充実した行事と日課の計画
- 2 教育目標とゆとりの時間との関連
- 3 ゆとりの時間の考え方と具体的実践例

障害児教育部会 「社会に適応できる人づくり」

- 1 障害の種類や程度に応じた教育方法と場の工夫
- 2 障害児学級における相互作用のさせ方
- 3 原学級との交流の問題
- 4 障害児教育に対する全職員の理解

○分科会の時程

13:00～14:20 ……前半

(10分…休憩)

14:30～15:40 ……後半

○この討議の柱にこだわっていただかなくてけっこうです

予想される話し合いの一例程度にお考いただき、御進捗ください。